

龍谷大学大宮図書館

二〇一五年度特別展観

むかしの科学あれこれ



日本銅製観象儀 江漢司馬煇の複製
寛政四年五月 牙田三郎左衛門町屋

龍谷大学大宮図書館 二〇一五年度特別展観

むかしの科学あれこれ

むかしの科学あれこれ

目次

特別展観の開催にあたって

図録

I 天文

1 須彌山儀

2 縮象儀

3 須彌山儀図・縮象儀図

4 世界大相図

5 諸儀象図

6 平天儀

7 地球全図略説

8 地球図

9 和蘭天説

10 初学天文指南抄

11 大明嘉靖六年歲次丁亥大統曆

12 寛政曆

II 数学

13 算用記

14 新編塵劫記

15 格致算書

16 算法童子問

17 狂歌近道算法早学び大意

III 化学・物理学・気象学

18 舎密開宗

19 気海観瀾

20 気海観瀾広義

21 七十二候

22 氣候懸断録

23 地震考

IV 植物学・動物学

24 怡顔齋蘭品

25 怡顔齋桜品

龍谷大学図書館長 安藤 徹

4

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

20

21

22

23

24

26

27

28

29

30

31

34

35

26	草花画譜絵本福寿草	36
27	華陽皮相	37
28	駱駝考	38
29	麴考	39
V 測量・地理		
30	分度余術	42
31	国図要録	43
32	新訂万国全図	44
33	蝦夷闔境輿地全図	45
VI 医学・本草学		
34	大谷文書(八〇九七)	48
35	紹興校定経史証類備急本草	49
36	本草綱目	50
37	薬性記	51
38	本草摘要講義	52
39	運氣論講義	53
40	内経素問講義	54
41	黄帝内経素問	55
42	明医雑著	56
43	医林類詳集要	57
44	袖珍方	58
45	全九集	59
46	側人明堂之図・人身五臓之図	60
47	解体新書	61
48	全体新論	62
49	中条流産科全書	63
50	婦嬰新説	64

・ 展示順序は、図録の掲載順と異なる場合があります。
 ・ 展示資料のうち、参考展示など一部の資料については本図録に収録していません。

特別展観の開催にあたって

龍谷大学図書館長

安藤 徹

二〇一五年八月、日本で原子力発電所が再稼働しました。

四年半前に私たちが経験した『三・一一』は、けっして思い出などにはなっていません。いまなお避難生活を余儀なくされている人が多くいます。福島第一原発の放射能汚染は現在進行形の事件です。核のゴミの『最終処分』とは、地中深く埋め、『ありがたい遺産』として未来に委ねてしまうことであるというのが、東日本大震災後も変わらぬ現実です。

あのとき、私たちは「想定外」なるものによって崩壊する科学・技術の『神話』をまざまざと目撃し、経験しました。それまで科学・技術に寄せられてきた信頼と希望とを大きく揺さぶった『三・一一』は、「決して懐かしさに変わらない後悔（影浦峽『信頼の条件』岩波書店、二〇一三年《深草・瀬田図書館所蔵》）」として、私たちの前に、そして私たちのなかに留まりつづけています。にもかかわらず、原発が再稼働されました。いったい、何が変わり、何が変わらなかったのでしょうか。

広井良典氏は、『三・一一』後の科学・技術のあり方を問うことは「『経済成長と科学』の関係を議論することであると指摘します。なぜならば、『『経済成長』という価値ないし社会の目標と、科学・技術というものは、分かちがたい形で結びつき、またそれに関する政策が展開されてきた』（『人口減少社会という希望』朝日新聞出版、二〇一三年《深草・瀬田・大宮図書館所蔵》）からです。つまり、科学・技術を問い直すことは、社会のあり方を抜本的に捉え直し、作り替える貴重な機会になるはずなのです。そのことを抜きに、『三・一一』以前へと回帰するようなことがあつてはなりません。世阿弥の「よき劫の住して、悪き劫になる所を用心すべし」（『花鏡』）ということばを、科学・技術においても十分に噛みしめる必要があります。

むしろ、科学を否定する、ということではありません。広井氏が述べるように、「本来、科学や技術のあり方は決して『ひとつ』ではなく、それは根底にある自然観や生命観・人間観とともに、また実現されるべき『豊かさ』のビジョンとともに、複数のものが存在する」ことを知り、これまでとは別種の可能性

を探り当てるのが大切なのではないのでしょうか。そのためにも、従来の（しかしすでに崩れつつある）自然科学／人文科学という対立図式に囚われず、『つなげること』『結びつけること』『関連づけること』の中だけに可能性がある（室井尚『哲学問題としてのテクノロジー』講談社、二〇〇〇年《深草・瀬田図書館所蔵》）という発想を持つことは有益でしょう。「人間・科学・宗教」の融合による、実践を伴うハイブリッドな『知』の創造をめざす龍谷大学の果たすべき役割は、きわめて大きなものがあるといえます。

龍谷大学図書館（大宮図書館）では、所蔵する貴重な古典籍等を多くの方にご覧いただくために、毎年、特別展観を開催しています。今年度は、本学に農学部が新設されたことを記念しつつ、さらに修復・復元作業を終えたばかりの「縮象儀」（七頁参照）を披露する機会も兼ねて、「むかしの科学」をテーマとしました。大宮図書館というと、仏教を中心とした人文系の貴重書のイメージが強いかもしれませんが。しかし、実際には自然科学系のさまざまな典籍史料も多数所蔵しています。「自然科学に象徴される近代科学的なアプローチと、いわば『民俗学的・歴史学的アプローチ』とも呼ぶようなような、歴史性や風土、宗教や自然信仰、文化やコミュニケーション等に着目したアプローチの両者を大きな視野で統合していくような、新たな『科学』ないし知のあり方」（広井良典『ポスト資本主義』岩波新書、二〇一五年《深草・瀬田・大宮図書館所蔵》）を探るきっかけとしても、大宮図書館だからこそ可能な、まさに時宜を得た企画だと自負しております。「科学の未来」のために「むかしの科学」に学ぶ。これこそが『未来志向』のあるべき姿です。

本展観の開催にあたっては、龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターのご協力を得ました。記して感謝申しあげます。なお、本学図書館のホームページでは、今回展示したものも含め、多くの貴重な資料をデジタル画像として公開しています。ぜひ、そちらもご覧ください。

二〇一五年一〇月

I 天 文

古来より、太陽や月をはじめとする天体の運行は、人々にとって時節を正確に把握するために、大きな拠り所になっていました。太陽や月、星の位置を知ることにより、農耕に適した時期を把握して作業をすることや、生活に必要な蓄えの準備を行うことなどに役立てていました。

やがて、天体の運行から、一年が三六五日であることを知ることによって、暦が作られるようになりました。また、天体を観察することにより、私たちの住む世界がどのようなものかを考え、世界観を表現するようになりました。

この章では、仏教の世界観を表現した天体儀である須彌山儀・縮象儀をはじめ、天体観測の機器を著した書物、日本や中国の暦などについて紹介します。



1 須彌山儀

田中儀右衛門(田中久重)製作
弘化四年(一八四七)着工、嘉永三年(一八五〇)完成、胴体直径六六・五cm、
高さ五五・〇cm

古代インドの思想の影響を受けた仏教の宇宙観では、世界の中心である須彌山を囲んで東勝身洲・南瞻部洲・西牛貨洲・北俱盧洲の四洲があるとされる。さらに、その周囲を太陽などの天体が運行していると捉えていた。いわゆる「天動説」の立場である。

一八世紀後半、西洋から「地動説」が日本に入ってくると、天台の僧円通(一七五四〜一八三四)が仏教の宇宙観を正しいものとして『仏国曆象編』を著し、自説を視覚的に表現した時計仕掛けの天体儀「須彌山儀」を初めて考案した。

円通の死後、「須彌山儀」の製作は弟子である環中禅機とその弟子の晃巖に受け継がれ、東芝の創始者である田中久重によって弘化四年(一八四七)に着工、嘉永三年(一八五〇)に完成した。

「須彌山儀」は、時計が一日分回るごとに天体が一度ずつ動き、一年で一周するように作られた。また、時計の動きに合わせて小寒・大寒などの二十四節気を知らせる機能も有していた。

今般、須彌山儀の重要な機構の一つである赤道環が発見され、これを須彌山上の二環(黄道、白道(須彌山儀では黒色環))の間に追加した。赤道環は、直径四一・〇cm、赤色竹製で、内面に一度刻みの目盛りを三六〇個書きこみ、外側の面には、二十八宿(古代中国で月・太陽の位置を示すために、天球を二十八に区分したもの)が描かれている。



2 縮象儀しゆくしょうぎ

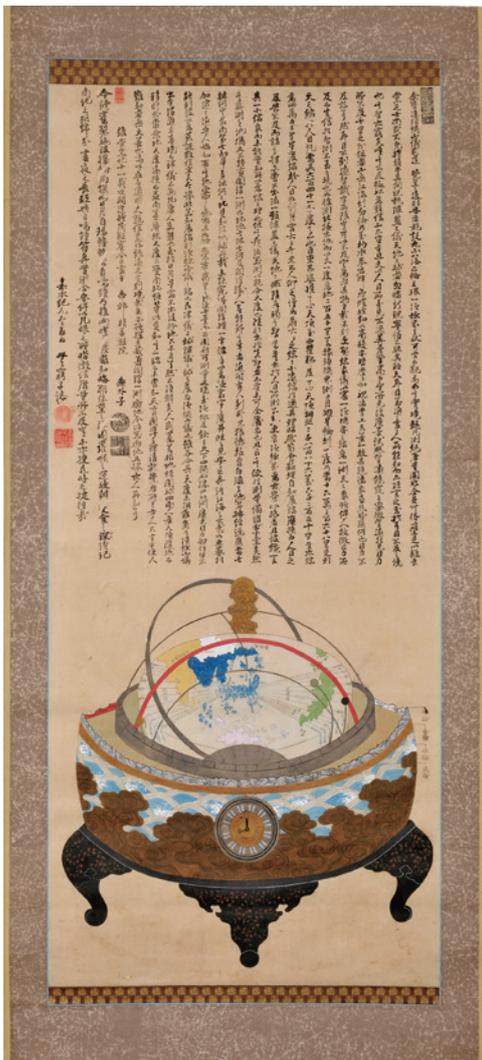
田中儀右衛門(田中久重)製作

弘化四年(一八四七)着工、嘉永三年(一八五〇)完成、胴体半径五一・〇cm、高さ二一・〇cm(天球環上部まで六四・〇cm)

須彌山の周囲に存在する四州の中で、我々人間が住むとされる南瞻部洲を拡大し、日本を中心にした世界地図を円形平面に描き、日・月・衆星を配し、ゼンマイ仕掛けで動くようにした天球儀が縮象儀である。現存するものとしては龍谷大学図書館所蔵のものが唯一である。今回の展示にあたって、劣化し剥落しつつあった外形の修復と保存作業を行い、併せて機構部分についても復元を試みた。

外形で特徴的な台座部分は、青貝螺細細工の鱗ひら付きネコ脚、胴部分は下部から風輪(雲)、水輪(波)、金輪、地輪(鉄囲山)と、黒・朱漆による塗り分けと蒔絵による加飾が施され、精緻な工芸技術を駆使していることが確認された。円形平面の世界地図および胴部分上部については、調査結果に基づき、製作当時の色を復元した。天球儀部については、須彌山儀と同一の赤道環(赤色鉄輪、直径三七・〇cm)が天球の北極にあたる部分に接続されている。

二十八宿が描かれた赤道環は平面の世界地図とおおよそ仰角三五度を保つことから、現在の京都市内の緯度と一致する。京都から観た太陽、星の関係を説明する天文時計ともいえよう。



3

須彌山儀図・縮象儀図

各一幅〔晃庵〕著〔嘉永元年（一八四八）〕木版摺彩色

須彌山儀図縦一九一・二×七四・七cm 縮象儀図縦一九一・二×七五・〇cm

〔請求記号〕〇二二・一八七・一

地動説に拠る仏教的宇宙観を擁護する円通は、天体儀を考案すること
で正当性を実証しようとした。そのために、それらを図にした「須彌山
儀図」・「縮象儀図」を著した。

円通の著した「須彌山儀図」・「縮象儀図」は、木版彩色でいくつか
摺られた。今回出陳している両図には、円通の讃があるものの、実際
に天体儀の製作を田中久重に依頼した孫弟子の晃庵による嘉永元年
（一八四八）の讃もあり、図も円通のものとは異なり、実際の須彌山儀およ
び縮象儀を模写して描かれている。

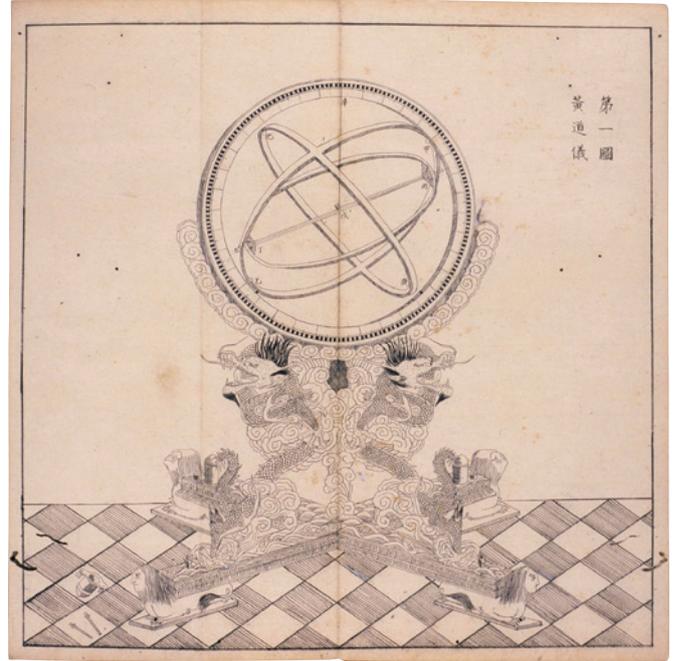
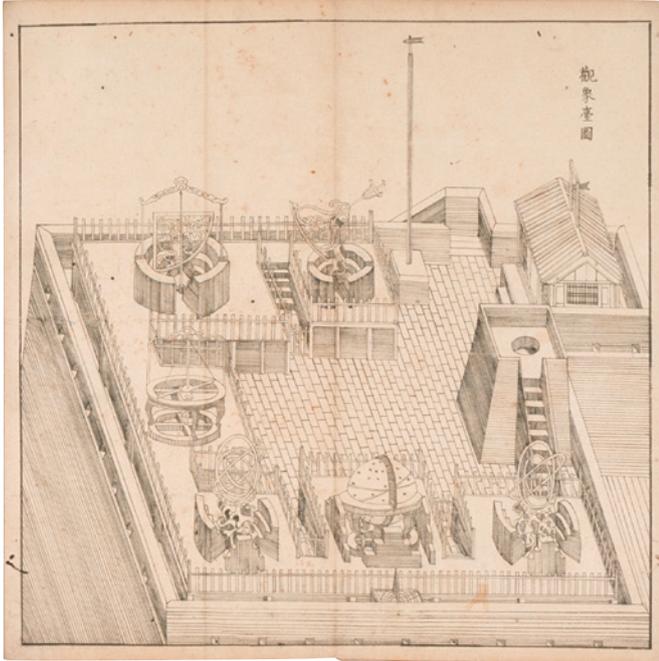
須彌山儀・縮象儀は、弘化四年（一八四七）に着工され、嘉永三年
（一八五〇）に完成している。おそらく、両図に限って、晃庵が製作中も
しくはある程度完成した須彌山儀・縮象儀を見て描いたのではないかと
考えられる。

世界大相図

一幅 存続筆 文政四年(一八二二)刊
木版彩色 縦一三〇〇×横五六・五cm
(請求記号〇三・一三五八一)



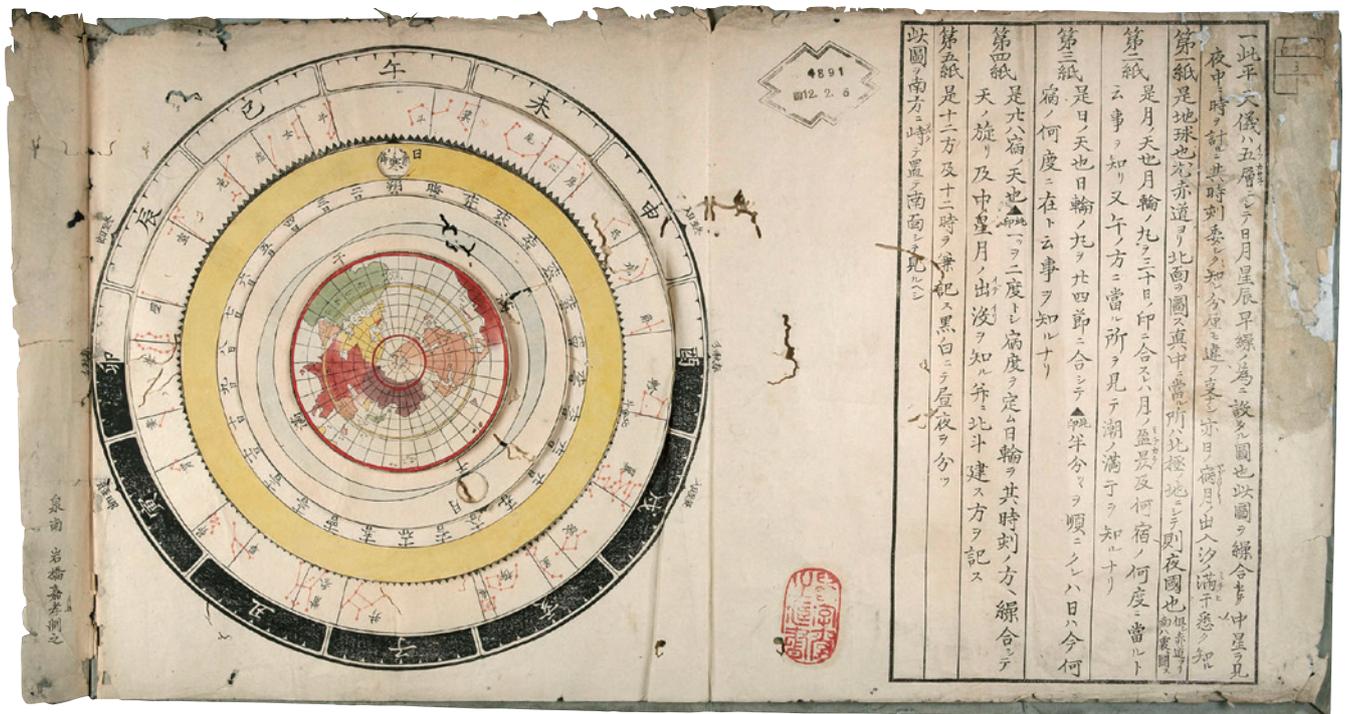
須彌山を中心とする宇宙模型図。同種のものには、中国・チベット・東南アジアの各地で描かれ、日本でも盛んに作られた。龍谷大学図書館所蔵のものは、文政四年(一八二二)の作で存続(？)一八四二の筆による木版画に手彩色がなされたものである。青と赤に塗られた中央の山岳が須彌山で、その右下に海に囲まれた南瞻部洲が描かれ、さらにその下は、仏教で殺生、偷盗、邪淫、飲酒、妄語などを行なった者が死後に赴くといわれる八熱地獄層をなしている。



5 諸儀象図

二帖 フェルディナント・フェルビースト (Ferdinand Verbiest 中国名・南懷仁) 著
 清康熙年間頃(一六六二〜一七二三)刊 縦三三・八×横一六・八cm
 (請求記号六〇九一九一二 写字台文庫)

フェルディナント・フェルビースト(一六二三〜一六八八)は、中国において康熙帝に天文学・数学を進講し、天文観測の諸器を作り、北京観象台で地理、地質、天文を論じた人物である。ベルギー生まれのイエズス会士でもあったため、西洋の知識を伝え、西洋暦採用の端緒をも開いた。本書は天文に係る諸儀の図をまとめたもので、観象台図や赤道儀、赤道儀、天体儀、渾天儀などの図が合計で一七七図ある。



6 平天儀

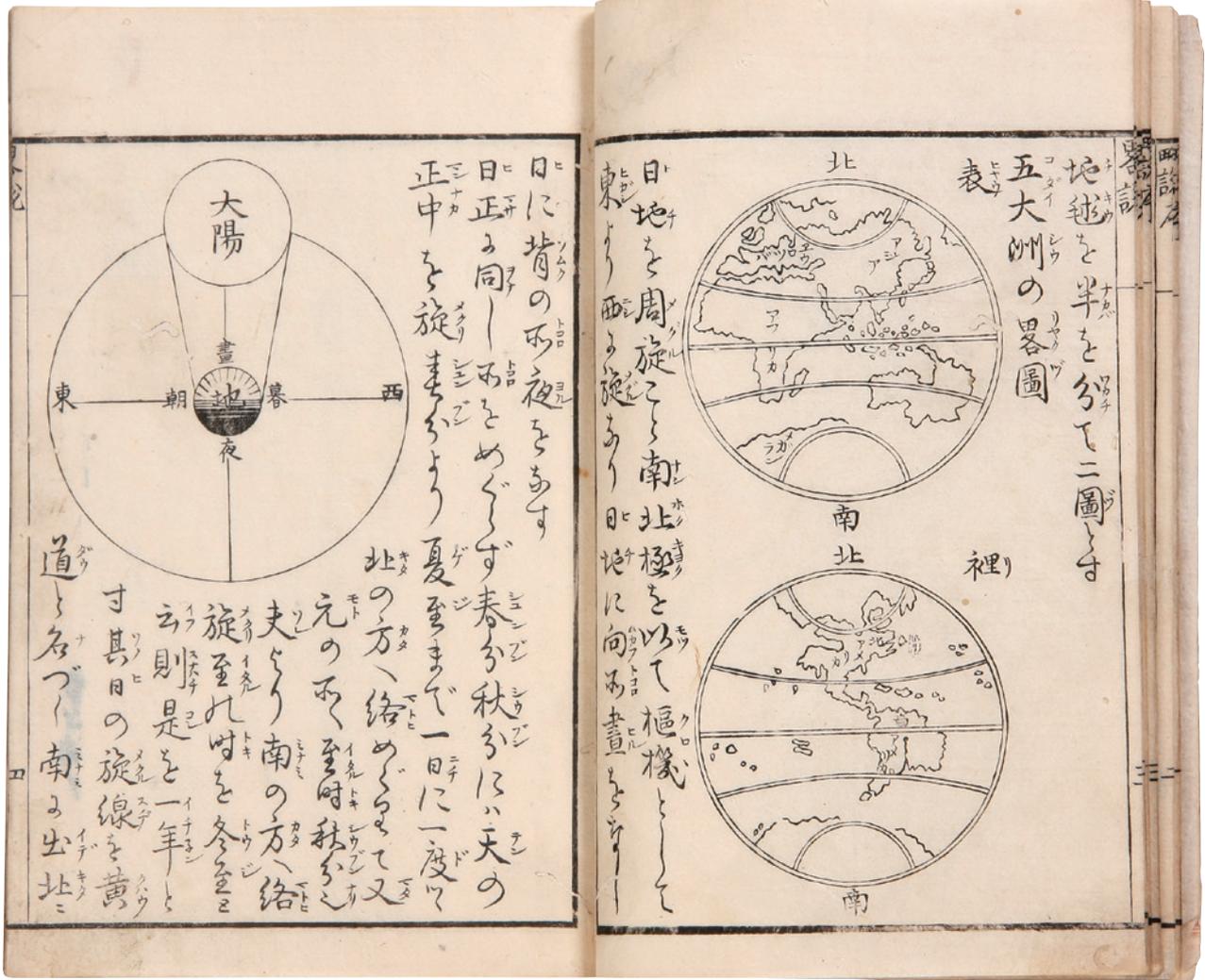
一冊 岩橋嘉孝作

享和元年(一八〇二)以前刊 縦二八・五×横二五・五cm

(請求記号六四三・一三一 写字台文庫)

平天儀とは、星の位置を地図のように平面図上に記した星図のことである。大坂泉南の人、岩橋善兵衛(諱嘉孝、称巖橋氏、号耕聊堂、一七五六〜一八一二)が平天儀なる装置を製作したとされる。これは五層の薄板の円盤を中心で止めて、互いに回転し得るようにしたもので、今日の星座早見盤に似ている。中央一番上の盤に地球が描かれ、次に月や太陽、黄道の描かれている盤、天球の二十八宿の描かれている盤などに分かれ、地球上各地における月・太陽・潮汐の干満などの関係が分かるようになっていた。

龍谷大学図書館所蔵本は、通行本に比べて享和元年の刊記がなく、説明記事が簡略であることから、通行本が完成した享和元年四月以前に刊行された版であるとされ、稀少である(海野一隆「岩橋嘉孝の『平天儀』」『科学史研究』四五卷二三七号)。



7 地球全図略説

一冊 司馬江漢著 寛政五年(一七九三)刊 縦二二五×横一五〇cm
 (請求記号〇四三—三三九—)

江戸時代後期の絵師であり蘭学者であった司馬江漢(一七四七—一八一八)は、日本初の東西両球図である『地球(全図)(銅版印刷)』の解説書として『輿地略説』を刊行した。本書は、後にこれを増補したものである。主に天動説に基づく内容となっているが、一部、地動説に関する記述も見られる。序文は、同時代の蘭学者である大槻玄沢(一七五七—一八二七)の「題地球全図」である。



8 天球図

一舗 司馬江漢著 木田三郎右衛門訂正 寛政八年(一七九六)刊 銅版
縦四〇・六×横九八・〇cm

(請求記号〇二二・二六七一)

司馬江漢による銅版の星座図。本来は寛政七年(一七九五)に作成した天文書である『和蘭天説』と組で出されたもの。もともとなった図は一七世紀後半のオランダの地図制作者フレデリック・デ・ウィット(Frederick de Witt 一六三〇～一七〇六)の天球図と推測される。なお、近年、幕府所蔵の天地両球儀を補修した北山晋陽(？～一八〇二)の『天球十二宮象配賦二十八宿図説』とその息子寒巖(一七六七～一八〇二)によるフィッセル改訂ブラウ世界図の模写を参考にしたことが指摘されている(橋本寛子「司馬江漢筆『天球図』制作背景をめぐって」『美術史』一六四)。

江漢の『天球図』は、南北の円周の縁に沿うように十二宮像と反転した二十八宿が合わさっている。星座は禽獣人物異形でもって表したもので、それぞれの星座名はオランダ語で記されている。ただし、十二宮だけは日本で使用している星座名に訳されていることが、本文中に「日本ノ法ニ訳スレハ熊ノ全身ノ星ハ北斗七星ト文昌ノ六星ナリ」と記されているところから分かる。彩色は後から施したものと思われる。

此理ヲ究ントス 地ハ天ニ浮係于其中國土チシ人ヲ生シ賢愚剛柔アリ上天子王庶ヨリ下ニ卑人アリ則貴賤ヲナシ西洋ノ人如キ絶巧ヲナシ不及モ又及ナシトス故ニ後世亦其巧ヲ次ア及スニ至ラン天ニ取ナシ又地ノ巧モ除キ是皆天文ノ天地間萬物ノ造化是ヲ天文ト云也

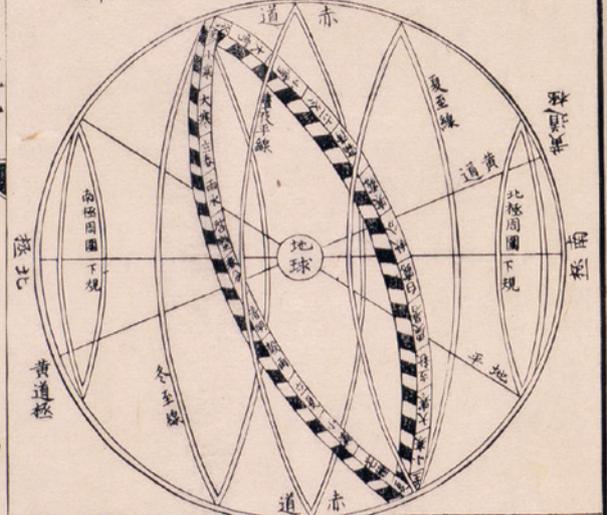
一 西洋ノ諸邦商船ヲ萬國ニ通シ其長官ナル者ハ交易ノ餘暇書ヲ編集スルコトヲ務トセリ嘗テ到處ノ風土物産或ハ身ヲ脩國ヲ治ルノ經典ヲ聽テ已カ邦ノ辭ニ翻譯ス 和蘭書中ニ有る者ハ皆萬國ノ事ヲ説ス者多シ

一 彼國ノ書物ハ文字ヲ以テ謂盡ササル者畫圖ヲ作テ曉シム予之ニ倣フ字ト画儀ヲ同ウメ國用トス 西洋画漢日本画如クテ其法々々不問故筆法筆勢論ヲ不問惟器以テ画去

一 爰ニ渾天ノ象ヲ圖メ春夏秋冬大陽日々ノ行道ヲ異メ南北四十七度ノ間ヲ往來スル象ヲ設ル者ニメ地球ノ中人ノ居スル所ニ隨テ地平各異ナリ故ニ晝夜ノ長短悉ク同カラズ黃道ハ斜ニ絡

環ヲ云大陽此環ヲ一年ニ一周旋スルノ道ナリ赤道トハ子午ヲ以テ平分ノ中道ヲ云環ヲ黃ト赤トニ彩タル名目ナリ其外月ノ朱白黒青ノ環ノ名アリ月ニ遊輪アリテ遅速アリ大陽ハ一日ニ一度ツ、天ニヲクル

赤道南北極之圖解



環ヲ云大陽此環ヲ一年ニ一周旋スルノ道ナリ赤道トハ子午ヲ以テ平分ノ中道ヲ云環ヲ黃ト赤トニ彩タル名目ナリ其外月ノ朱白黒青ノ環ノ名アリ月ニ遊輪アリテ遅速アリ大陽ハ一日ニ一度ツ、天ニヲクル

9 和蘭天説

一卷 一冊 司馬江漢著 寛政八年(一七九六)刊
縦二六・七×横一七・七cm
(請求記号六四〇一四一)

別名『和蘭陀天説』。前述の銅版『天球図』とセットで刊行された。その内容は星座の解説にとどまらず、コペルニクスの地動説に拠った太陽系諸天体の現象に重点をおいたものであり、江漢による天文学の本格的著作といえる。さらに、天文学だけでなく西洋世界の地理、文学、宗教など、その書名からすればおそろしく広範囲な事象を扱い論じている。江漢の弟子であり天文家である片山田然(一七六四〜?)の記述によれば、本書は『和蘭天文秘書』から抜粋、撰述したもので蘭書『ポイス』『ウーヘンスカウル』等を翻訳し、中国の『奇児(ケイル)全書』を和訳したものだといふ。しかし、実際には、阿蘭陀通詞であった本木良永(一七三五〜一七九四)の訳本によるところが多かったとされている。

新製渾天儀圖



同新製寸法

六合儀四本

内天經環指渡一尺二寸闊六分厚一分三厘二本

天緯環指渡一尺二寸二分六厘闊六分厚一分三厘一本

地平環指渡一尺三寸闊七分半厚二分六厘一本

三辰儀四本

天經環指渡一尺一寸二分五厘闊五分半厚一分三厘一本

赤道環指渡一尺一寸五分一厘闊五分半厚一分三厘一本

黃道環指渡一尺九分九厘闊五分半厚一分三厘一本

分三厘一本

分三厘一本

10

初学天文指南抄

五卷 五册 馬場信武著

宝永三年(一七〇六)刊 縦三・九×横一・六・五cm

(請求記号六四〇・九一五 写字台文庫)

著者である馬場信武(？)一七一五)は、儒者であり、暦学や易学、兵学などに通じていた。また、中国の書物を訳すことも手掛けていた。中国の天文関係書について、漢語であるため庶民には分かりにくいことから、諸家の説を折衷して日本語に訳し、庶民にも読めるように本書を刊行した。

内容は、渾天儀などの天体観測器機に関することや天体の動き、二十八宿による占卜に関する事など、天文に関するさまざまなことが記されている。



11 大明嘉靖六年歲次丁亥大統曆

一冊 刊本 縦三〇・〇×横一七・九cm

(請求記号〇二四三二四四一)

明代の暦法である大統曆は、元朝の科学者であった郭守敬(一二三二-一三二六)が考案した授時曆に一部修正を加えたものである。一年の長さを三六五・二四二五日として、現代の曆に比べてもかなり精度の高いものであった。明朝初めの洪武元年(一三六八)から明朝が減じるまで用いられた。日本にも影響を与え、短い期間ではあるが貞享元年(一六八四)に暦法として採用された。

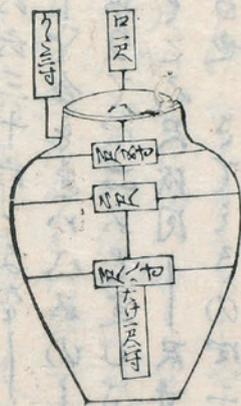
本書は嘉靖六年(一五二七)の大統曆であるが、一年が三五五日と短かくなっており、次第に暦日と日月食をはじめとする天象に食い違いが生じてきたことを物語っている。

II 数 学

人々が狩猟や採集を行っていた頃から、生活を維持するために、獲物などの数を把握することが必要でした。一説には、有史以前に数学の知識があったとされています。文明成立後は各地で様々な水準の数学が発展し、やがて現代の数学に繋がっていきました。

この章では、江戸時代の日本で刊行された数学書を紹介します。現在の数学書と違い、米の相場計算など実生活に結びついた様々な計算が取り上げられています。

二五のしあゆく見るなり 又六二五よ見る
 けりい十窓のこゑもてけりけりけりけり
 こくの入り三十三石三三ろく六合けりや
 けりけりけりけりけりけりけりけり



見きけりけりけりけりけりけりけりけり
 毎又けりけりけりけりけりけりけり

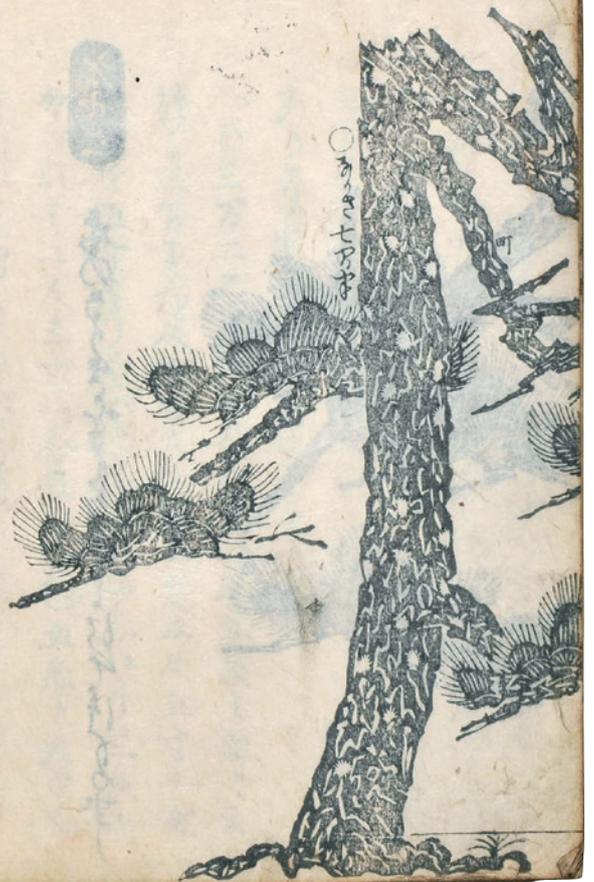
さて右けりけりけりけりけりけりけり
 の次一尺五寸よ 一尺五寸けり二尺二寸五
 ふとまを一 同中の二尺と二尺二寸と
 まを五 同中のつき一尺八寸に一八とけり
 三尺二寸五ふとまを一そのあの七寸を七とけり
 寸九ふとまを五とてけりけりけりけりけり
 けりけりけり 九尺九寸八ふあり けりけりけり
 りり一と分を五とて二尺四寸九ふとまを
 めさてまきの面ふ七九とま九とまのけりけり
 けりけりけりけり 一尺七一のま又けりけり
 長けり二尺二寸けりけりけりけりけり

13 算用記

一巻 一冊 著者・刊年不明 木活字版 縦二五・三横一八・三cm
 (請求記号〇二一四三六一一 写字台文庫)

本書は、写字台文庫(西本願寺歴代宗主収集の書籍)の中の一冊として
 収蔵されている貴重書で、日本人が書いた刊本数学書のうち最古のもの
 として位置づけられている。一六〇〇年頃のものと考えられるが、刊年
 も著者名も目下のところ不明である。

日本文化史上、江戸時代前期の和算(日本数学)は、吉田光由の『塵劫
 記』(寛永四年(一六二七))、関孝和の『発微算法』(延宝二年(一六七四))
 等の出現により、驚くべき高度な計算法の域に達していたことが知られ
 ている。それに比べて、本書は内容の単純さが指摘されてはいるものの、
 日本数学の祖ともいわれる毛利重能著『割算書』(元和八年(一六二二))
 のほとんどが本書の内容を受け継いでいるとされることから、その先
 駆的重要性が確認できる。なお、下平和夫氏監修『江戸初期和算選書』
 第一巻二(研成社 一九九〇年)として、佐藤健一氏のすぐれた校注によ
 り復刻された。
 近世初頭における貴重な和算書が、ほかでもなく西本願寺歴代宗主の
 蔵書中に収蔵されていることも注目に値する。



法しんきんのりんを四し角かくのりて
 又またともみみとありて下くだすすよ
 小こ石いしをりてりひひてほりさけて
 かかししすすししくくのりんをああららびびて
 足あららししききてるああららりり木きのりん
 ままたたけけんんささをりてりてみるみああ
 ちちのりんをああららびびと三尺せきのりん
 ありり木きのりんをああららびびと三尺せきのりん



14 新編塵劫記

一冊 吉田光由編著 寛永四年(一六二七)刊 縦二六〇×横一八二cm
 (講求記号〇三二一五四九一)

本書は、江戸時代初期の算学者吉田光由(一五九八〜一六七三)の著作で、和算書の中で最もよく知られているものである。頻繁に刊行され、その版種は膨大な数に上る。

内容は、米や布の売買、土地の面積、体積、高さなどの計算例をあげ、なおかつ図解するものである。説明の文章も平易であることから、庶民階層にも広く普及した。その人気は絶大で、初刊まもなく海賊版が横行した。そこで著者吉田光由は、寛永十一年(一六三四)版の刊行に際し、その一部分を色刷りにして、海賊版と著者自身が関与する版本との差異を明確にした。もちろん、多色刷は当時としては珍しいものであり、海賊版の版元にはマネのできない最先端の技術であった。

吉田光由の外祖父は、豪商として広く知られる角倉了以(一五五四〜一六一四)で、その父兄は貿易に従事していたという。また、一族の角倉素庵は嵯峨本(慶長年間に刊行された美術的な古活字版で、当時の著名な芸術家本阿弥光悦も関与する)の刊行に深く関与するなど、角倉家は近世初期の出版文化と関わりの深い家であった。吉田光由が色刷りに目をつけたのも、こうしたことと無縁ではないとされている。

方 截



上方
一人前
中
一人前
下方
一人前
上長 下長
上長 下長

右より左に截る中より下より上より

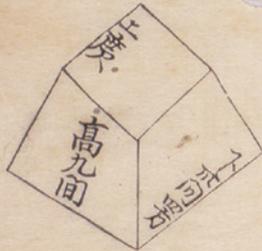
去人より九指也坪各
五二一人中百坪也又去
人より下より九指也坪各
五二一人中百坪也又去
人より上より九指也坪各
五二一人中百坪也又去

圓 基



有坪二百四十五坪
以下に間ぬる程

方 基

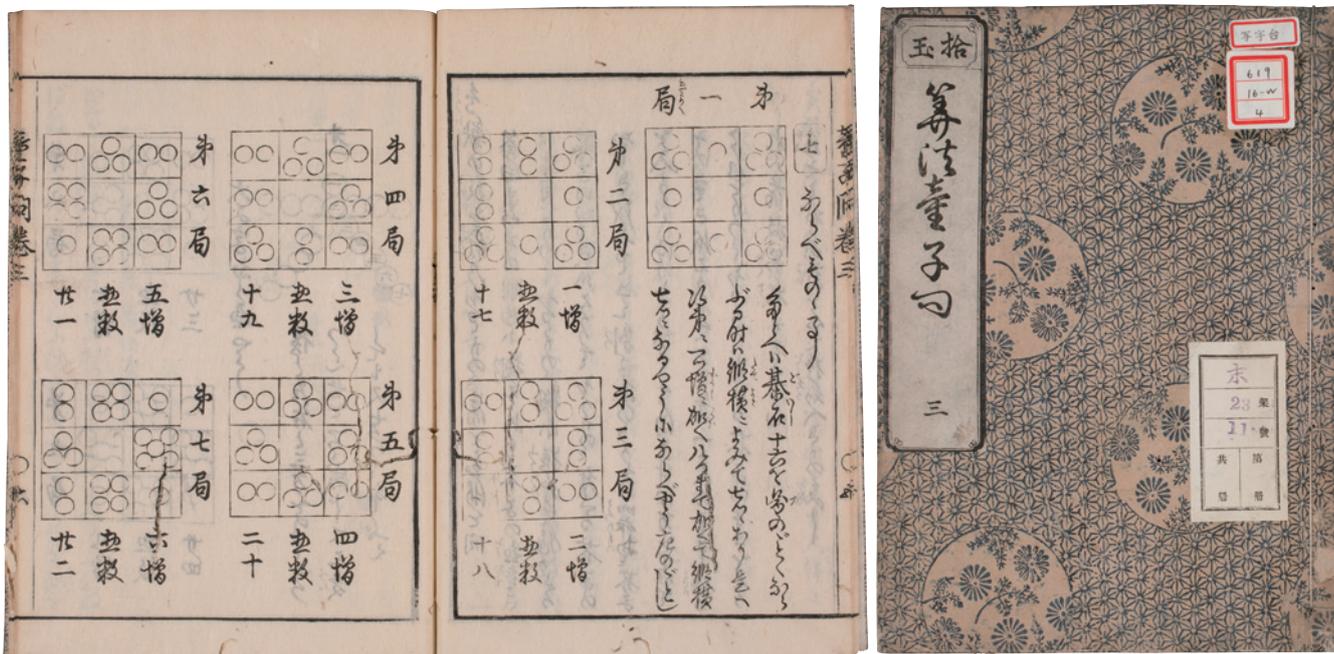


有坪五千九百九十五坪
七合五夕
以下に廣間行程要方

15 格致算書

存上巻 一冊 柴村盛之著 明暦三年(一六五七)刊
縦一〇〇×横一四・〇cm
(請求記号〇二四・三一〇六八一)

本書は本来、上中下三巻からなるが、龍谷大学図書館所蔵本には上巻一冊のみが残る。はじめに天地生数、五行始生などの説明図がつづき、その後『塵劫記』の遺題解答が示されている。丁字形の道を円の中に入れて円面積を三等分する問題、球体積を三等分する問題、内角の二つが直角である台形に関する問題なども付け加えられている。ちなみに中巻・下巻には、上巻の問題の解説や初等数学の問題と解説などが掲載されている。



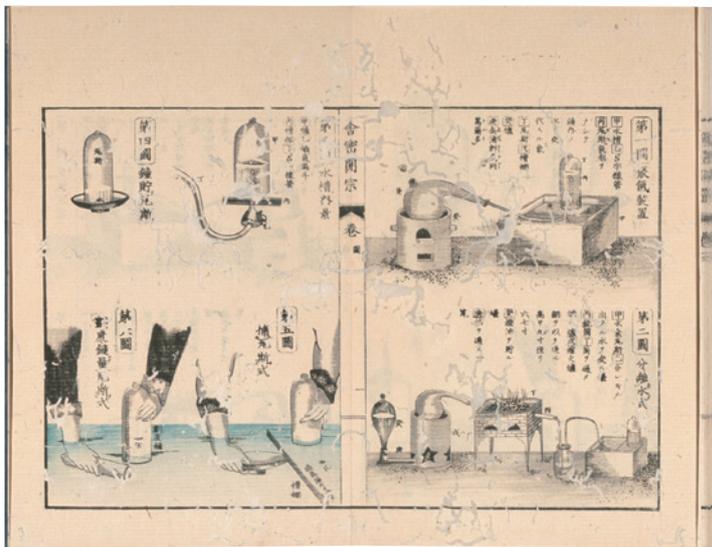
16 算法童子問

五卷首一卷 六冊 村井中漸著 天明四年(一七八四)刊
 縦二・三×横一五・八cm
 (請求記号六一九一・六一六 写字台文庫)

和算学者である村井中漸(一七〇八〜一七九七)が著した和算書。和算について童子に問う形式で、問題とその解答が記されている。内容は、商売に関する計算、算盤による計算、鶴亀算といった算数問題、測量、度量衡など多岐に及んでいる。童子にも分かる内容で、老若男女が和算を理解できることを目的としている。

Ⅲ 化学・物理学・気象学

自然科学の発展に伴い、物質の性質や構造などを研究する化学や、物質の運動などを研究する物理学、天候の変化などを研究する気象学などの部門が生まれました。この章では、化学・物理学・気象学に関する書物を紹介します。



18 舎密開宗

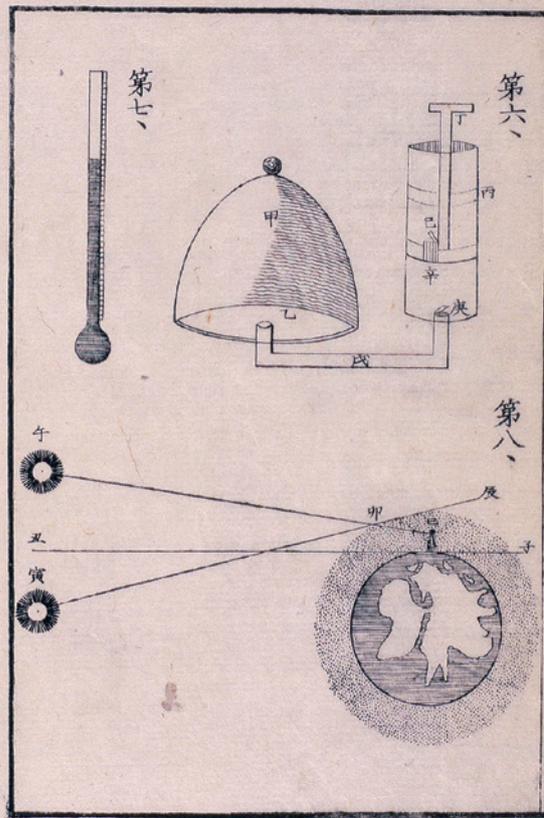
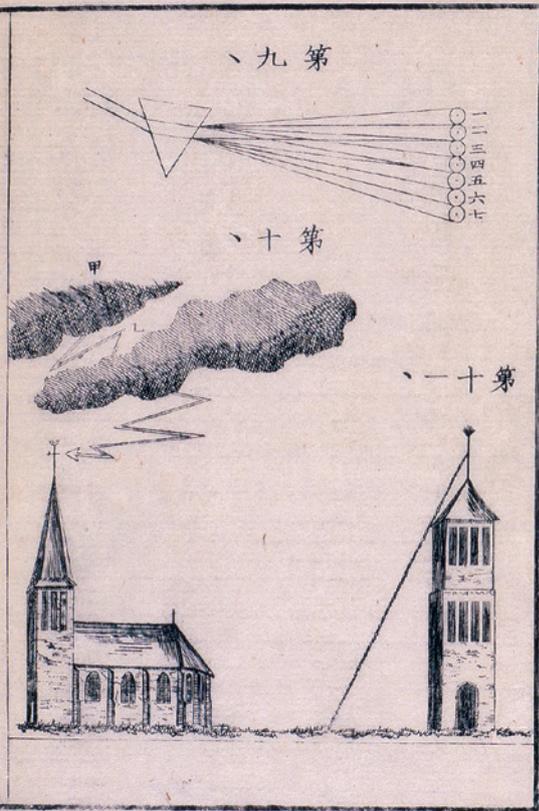
内編一八巻 外編三巻 七冊 宇田川榕庵訳

天保八年(一八三七)弘化四年(一八四七)刊 彩色図入

縦二五・八×横一八・〇cm

(請求記号六三〇一〇一七 写字台文庫)

日本最初の化学書。イギリスの化学者ウィリアム・ヘンリー (William Henry, 一七七四～一八三六) の著書『実験化学要義 (Elements of Experimental Chemistry)』(一七九九年刊) をドイツ語訳したものをさらにオランダ語に重訳したものを原著とし、幕末の蘭学者宇田川榕庵(一七九八～一八四六) が晩年の情熱を傾けて訳した名著。訳とともに自らの注釈・実験の結果も記している。「舎密」はオランダ語の Chemie (化学) の音訳であり、「開宗」は、「物の大元を啓発する」という意である。それまで日本における化学に関する知識は、薬剤を調整する必要から医者によって研究されていたが、本書によってはじめて科学のカテゴリーの一つとしての「化学」が樹立されるにいたった。全七編二一巻、内編一八巻六冊・外編三巻一冊より成る。片仮名交じりの本文、彩色刷の挿画多数入。初編から六編に内編一八巻を、七編に外編三巻を収録。



19 氣海觀瀾

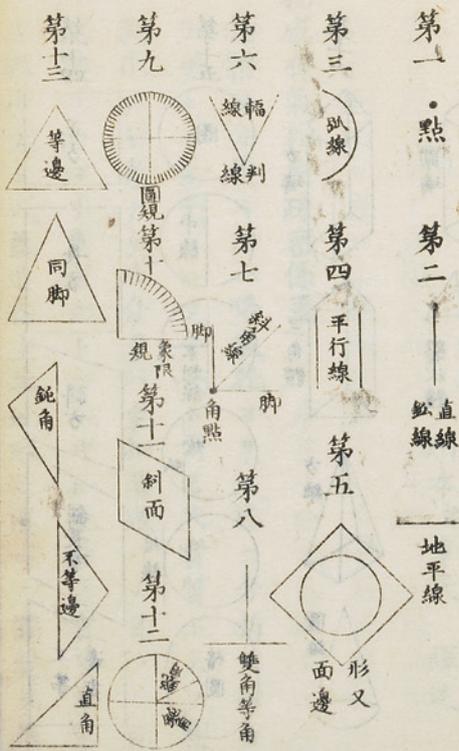
一卷一冊 青地林宗著 文政八年(一八二五)序 刊本
 縦三五・七×横一七・五cm
 (請求記号六四七・二一)

医者である青地林宗(一七七五〜一八三三)は早くから漢方を学び、のち蘭方を志し、天文学なども学んでいた。文政五年(一八二二)に幕府天文台訳局訳官となり、多くの洋書を翻訳した。文政八年(一八二五)に刊行された本書は、西洋物理学の紹介書として最も整ったものであり、有名なボイス(Johannes Buijs)の『Naturkundig Schoolboek』(一七九八年刊)等を抄記したものと見られている。書名の「氣海」は「人畜ハ氣海ニ遊泳ス」と示されているように「宇宙」を意味したものであり、体性(物体)の概念、引力等から各元素、化合物に至るまで説明が及んでいる。また、「エレキテル(電気)」に関する記述もあるが、やや難解であったため、青地氏の娘婿、川本幸民により、『氣海觀瀾広義』(全一五卷)が再度著述された。

ベシ。若人目ヲシテ「ローウン」ノ顯微鏡ノ如クナラシメバ。微細ノ物眼前ニ填充スベク。又耳ヲシテ此ノ如ク聴ナラシメバ。愛スベキ音樂ノ調モ猶雷ノコトクナルベク。鼻ヲシテ此ノ如ク敏ナラシメバ。芳香ナル花モ猶蘭クニ堪フベカラザラム而シテ然ラサル者ハ。是蓋化工ノ刺座設セサル所ナリ。

氣海觀瀾廣義卷一終

圖解



20 氣海觀瀾廣義

一五卷 五冊 ボイス著 川本幸民訳 嘉永三年(一八五〇)序 刊本
 縦二・八×横一五・六cm

(請求記号六四七一一五)

青地林宗が著した『氣海觀瀾』は、物理学において最初の紹介書であったが、ボイスの著述等を翻訳抄記したものであり、簡単に略してためめ読者には理解しにくい部分があった。林宗自身はさらに全体を詳細に訳して世に広めようと志していたようである。しかしながら、果たせぬまま没したため、林宗の娘婿の川本幸民(二八〇〇〜一八七二)が志を受け継ぎ、詳細に訳した『氣海觀瀾廣義』を刊行した。

『氣海觀瀾廣義』は、日本理科教育の原点の一つであり、明治時代に入ってから上等小学の教科書とされ、日本の自然科学分野の形成に多大な影響を与えた。



廿七

菊有黄花

季土將胜 黄花書榮

菊着不花 稼穡不収

21 七十二候

三卷 附七十二候抄一卷 四冊 久佐道允著 寛文四年(一六六四)刊
 縦二六・七×横一九・五cm

(請求記号六四五―二六一四 写字台文庫)

「七十二候」とは二十四節気(一年)を分割し、時候の変化を示したものである。五日を一候とし、三候を一気とし、六候を一箇月としている。中国では既に紀元前三世紀末ごろに七十二候の方法が確立し、正史の律曆志などにはその名称が記載されてきた。七十二候は曆学的なものであると同時に、季節の移り変わりにみられる気候の変化について、二十四節気よりも具体的に、自然現象を通じてあらわしている。例えば、寒露かんろの次候(一〇月一四日～一〇月一八日頃)を「菊有黄花」きくじゅうかありなどのように表現している点に特徴がある。

645
27

百王 休無窮 雨暘時若
穀具豐 兆民維樂

農業
必用
氣候懸断録 全

播州姫路 探淵齋施板

氣候懸断録序

方言。天地之大。人猶有匪感。言

風雨寒暑之不均也。蓋天地之化。

紛紅雜糅。有氣數之變。有風

去、異。混以人事之威。祥災錯

化。早滂時臻。雖有聰明聖知之人。

氣候懸断録

序一

22

氣候懸断録

一卷 一冊 西城戸(菅原)正義(正信)著 文化七年(一八一〇)序刊
縦一七・二×横一一・四cm
(請求記号六四五二七一一)

本書は、農業や海運にたずさわる人々などが晴雨の変化、暴風や大雨などで困らないようにと書かれた気象に関する書である。最初に日本における一年の気候の変化に関する概説を述べ、そのあとで正月から二月までの月ごとの天気の特徴や気候の変化などがよくまとめられている。例えば一〇月は「当月は雲がちにして晴間少なく日々班々として時雨ふり」などのように特徴を詳述している。

IV 植物学・動物学

人々は生活の中で、身近な植物や動物について関心を持ち、調べるようになりました。例えば、身近な動植物について、その種類とそれぞれの特徴や名称について研究することをはじめとして、日本にいない動物について文献などから考察するなど、多岐に渡りました。

この章では、観賞用植物として知られる蘭について取り上げた『怡顔齋蘭品』や、日本では実際に見ることができなかったラクダについて考察した『駱駝考』などを紹介します。



蘭艸

平安

佐伯博圖

書

朝散大夫紀正邦書



24

怡顏齋蘭品

二卷 二冊 松岡玄達(恕庵)著 明和九年(一七七二)刊
 縦二七・二×横一八・七cm

(請求記号六七〇―八―二 写字台文庫)

江戸時代中期の本草学者である松岡玄達(一六六八〜一七四六)の著書の中には「品」とつくものが一〇点あり、これを「怡顏齋十品」という。本書はそのうちの二つで、蘭の品種を集め、図を付して説明した書であり、単に『蘭品』ともいう。

蘭草類三種、蘭花類二二種、本蘭類五種、昌蘭類二二種、有名未識類一五種と分類され、全部で五類四六種が収録されている。図は下巻の後半にあり、「佐伯博図」とあることから、玄達の弟子で本草学者として著名な小野蘭山(一七二九〜一八一〇)の手によるものと分かる。全三〇図。

櫻品

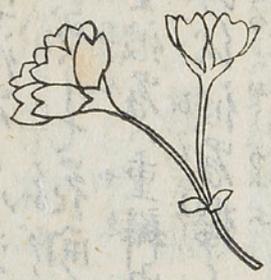
彼岸櫻



廿五

○怡顏齋曰、早一二月、早の節、用く是、則海棠の誘、の、は、取の、尋、み、海棠、ふん、枝の、頭、よ、兼、り、生、じ、地、層、枝、の、の、ど、花、甚、ひ、ん、ど、く、早、也

波女彼者



八重彼者



眼女品

〇十六

25

怡顏齋桜品

一卷 一冊 松岡玄達(恕庵)著 實曆八年(一七五八)刊
 縦一六・三×横一一・三cm

(請求記号六七〇・九一 一字台文庫)

『怡顏齋蘭品』と同じ「怡顏齋十品」の一つである。日本人に好まれる桜について取り上げている。江戸時代初期の儒学者である那波活所(一五九五〜一六四八)が、先行する書物というべき『桜譜』を著していたが、種類は一五種で遺漏も多く、間違いもあることなどから『桜品』を著したという。

収録されている桜の種類は、彼岸桜をはじめ六九種類に及び、図版も用いてその特徴を詳しく説明し、開花時期や同類とされる桜についても記述されている。

六月菊
カウライキリ
故荒

淵明

留主

ふきや

云

の
さく



二月下旬ヨリ夏末ケテサク也
色シロ或ハ巻片ノハシ匂アリ

寸
ソ務

スミトリクサ
カキサウ
ユトヒキクサ

紫花地丁 木綱
莖莖茶 救荒

万葉
春水時

こしこまぞ

時

一
糸



三月
花コキムラサキ
或ハ白
ウス紫ノ
品アリ

26

草花画譜絵本福寿草

五卷 五冊 大岡春卜編 大岡春川画 元文二年(一七七七)自序 刊本
(請求記号〇四三二〇二五二)

狩野派の絵師である大岡春卜(一六八〇〜一七六三)が編集し、養子の春川(一七一九〜一七七三)が挿絵を手掛けた書物である。頁上段には、植物の和名・漢名・異称やその植物にまつわる詩歌を記し、下段には、植物画と花の色や咲く月を示している。内容から、本草書としてだけでなく、俳書や絵手本としての用途を兼ね備えていた。

駟しの緑馬也油あぶらはくす毛けの和名抄わなな小云油馬あぶらうまと糟毛馬也かすがうま
 と駟油馬しあぶらうまの此こゝより糟毛かすがといふ毛也けとて糟毛かすがと油あぶらといふ油あぶら
 余故あまの友ともと袖そでの字なと通と入い毛中けちゆう関せきとて光あかりあるか如ごとくある
 光あかりへは仲馬なかとまと名なく舊海ふるうみは油あぶらの光あかり河かの也なりと徑より
 糸いと黍あはの光あかりありといへり古語ふるご小願せうがん草油くさあぶらといふもと茶ちや糠ぬか
 油あぶら甚お面おもといふもと皆みなとてつくとむらうといふも
 駟し玉たま篇へん紫馬也むらさきうまとす故ゆゑ東國とうこく小荔枝せうしち枝えだ吉銅きちどうの色いろり
 彩いろとみれを古ふるへといへり紫むらさ色いろは河か守まも後ごの紫むら駟し馬ば
 相照あひあして見みるべし和名粟毛わななあはも

駟油馬

駟羊朱切



27

華陽皮相

二卷 三冊 平沢旭山(元愷)著 寛政元年(一七八九)刊
 縦二七・〇×横一八・七cm
 (請求記号六八〇九一―三三)

馬の種類や毛色、各種名称などを図解した解説書。本書の三冊目『華陽皮相原稿』(漢文)を国文になおして説いたもの。馬に関する特徴などを学術的に詳述している。図には木版彩色がされており、色などの特徴がわかりやすいよう配慮されている。著者の平沢旭山(一七三三―一七九二)は、国学者の荷田在満(一七〇六―一七五二)の学流を汲んだ漢学者で、文章家として知られ、その著書は多い。

est 8918
No. 12. 1. 19

681
1
1

長嘶不待九方臯千里材良役
轉漕自有閑鞍愉溫綉還愈海
胎畏風濤擬噴黃帝指南呀却
惜益集延北勞喘草飲泉也知
足何曾伏櫪靈逢遠

詠囊駝
木川其故事
中山公愷
小鼓山田平書



28 駱駝考

一卷一冊 唐公愷(堤它山)著 文政七年(一八二四)序 刊本
縦二六・二×横一八・〇cm
(請求記号六八一―一)

別名『蒙駝考』ともいう。最初の頁に銅版によるラクダの図が描かれている。当時珍獣であったラクダに関して各種文献からの引用などを交えながら解説した書であり、『日本書紀』や『西域聞見録』などから引かれている。
文政四年(一八二二)、オランダ船が將軍への献上を目的に、ヒトコブラクダの雌雄を船載するという出来事があった。本書も渡来したラクダの影響を受けて、著されたものである。

牡麋圖 唐太島産

文久士戌初秋
西泰鎮臺糟屋
義明筑後守上
進麋壯其此
者與本草存真
圖所載小入鹿
者相符其壯者
二牙香臍皆具
能不堪欣喜因
補屬于此



香臍

牝麋圖 同上

宋爾雅云
麋牡麋牝
麋即是也



麋圖

麋圖

六

麋圖

29

麋 麝 考

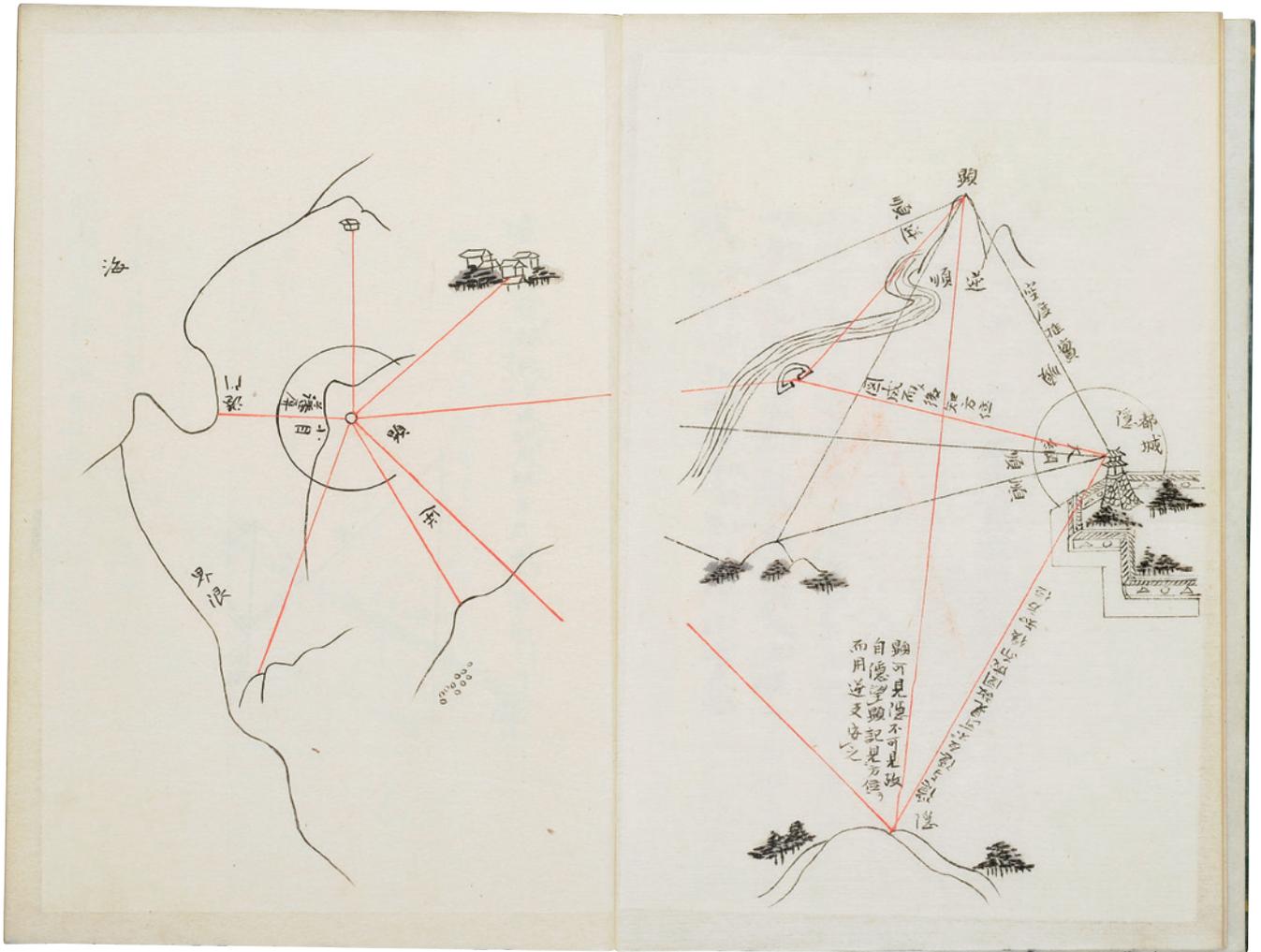
六卷 附一卷 二冊 大淵常範纂 安政七年(一八六〇)序 刊本
 縦二八六×横一九九cm
 (請求記号六八八・九一―一)

江戸後期から明治時代初期の医師で、本草家でもあった大淵常範(一八一六〜一八八九)が編纂した博物学の書。学問は、祖父で同じく医師・本草家であった栗本丹洲(一七五九〜一八三四)に学んだ。本書の内容は、「麋」(ノロジカ)と「麝」(ジャコウジカ)について、多くの和書や漢籍から関連する文献や図版を引用して、その特徴などについて述べている他、それらから採取される麋香や麝香の効能などにも触れられている。

V 測量・地理

農業では、農地の面積を測ることや山・川の距離を測るために測量の技術が生み出されました。測量技術により、人々は農地に限らず、自分たちの土地も測量するようになり、やがては地図を作製するようになりました。

この章では、測量方法を記した書物である『分度余術』や、江戸時代に西洋の資料を取り入れて作製した世界地図である『新訂万国全図』などを紹介します。



30 分度余術

六卷 六冊 松宮觀山(俊仍)編 青山愷校 万延元年(一八六〇)写
 縦二六・五×横一八・五cm
 (請求記号六四八―一六)

測量に関する書で、規矩元法を記したものの。地図、測遠、雑技、航行等のポイントを記載する。測量機器等を示し、城や平地・山・水域などの測法により、海路の方針や里程等を記し、天測の概要や方差等を表示し、さらに算術によるものをも記入している。本書は享保一三年(一七二八)に記されたものの写本である。

松宮觀山(一六八六―一七八〇)は軍学者として有力な人物である。元禄一二年(一六九九)、江戸に遊学し、享保日本図の編集に携わることになる幕臣の北条氏如(一六六六―一七二七)に従い、幕史として蝦夷をはじめ、各地を調査した。また、国学・兵法から測量・天文・数学にわたる幅広い学問を修めた。

2283
1041
1



國圖要録

程量

一 欲為國圖則先其國之縱橫廣狹他國境領分境未道任
路山川城下ヨリ他國道節ヲ審ニ問テ安テ遠近險易ヲ
圖之形ヲ心ニ圖ルシ曰程量ト

觀察

一 其國安テ寒暑寒氣強而雪早ク降ル國ハ十月ヨリ道路
塞テ翌年迄不能經過亦雖強寒氣至春雪消ルコト早
有國者其氣候夏日廻海邊秋日可入山澤豫ノ程過
日數ヲ積リ知ラズ

真行草



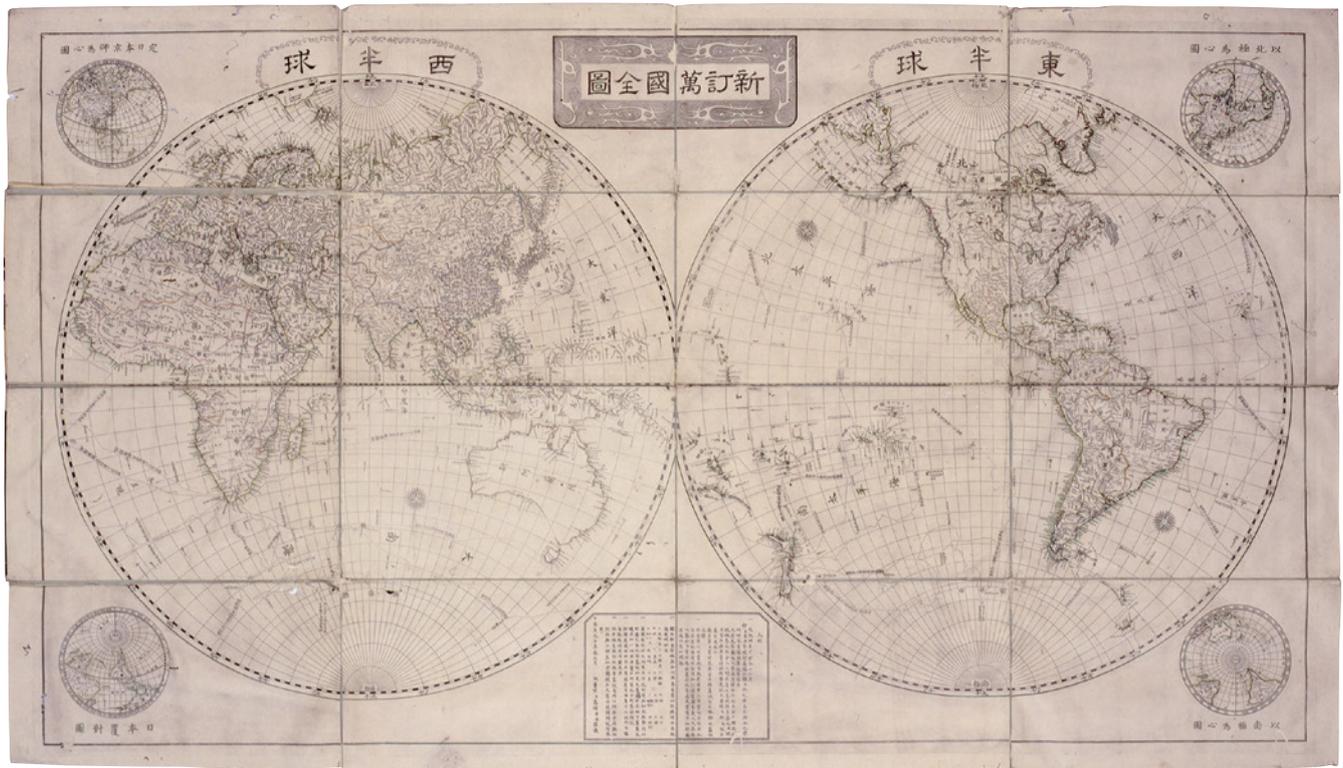
31 国図要録

一卷一冊 河原貞頼編 享保二年(一七二七)奥書 写本
縦三五・五×一七・一cm

(請求記号〇四三・一〇四一)

江戸時代の測量術の一つである清水流の書。清水流測量術の創始者であつた清水貞徳(一六四五〜一七二七)が、国絵図作製の要点を著した『国図枢要』について、弟子である河原貞頼(一六六五〜一七四三)が内容を補充して充実させたのが本書である。

内容は、勘・用具・業の三部から構成され、それぞれ国絵図作製に必要な計画、用具、測量作業について述べられている。現在知られているものは、いずれも稿本であり、わずかに日本学士院などに所蔵が確認されているだけで稀少である。国絵図作製の技術的な要領を体系的に記述したものである。資料的価値が大きいといえる。



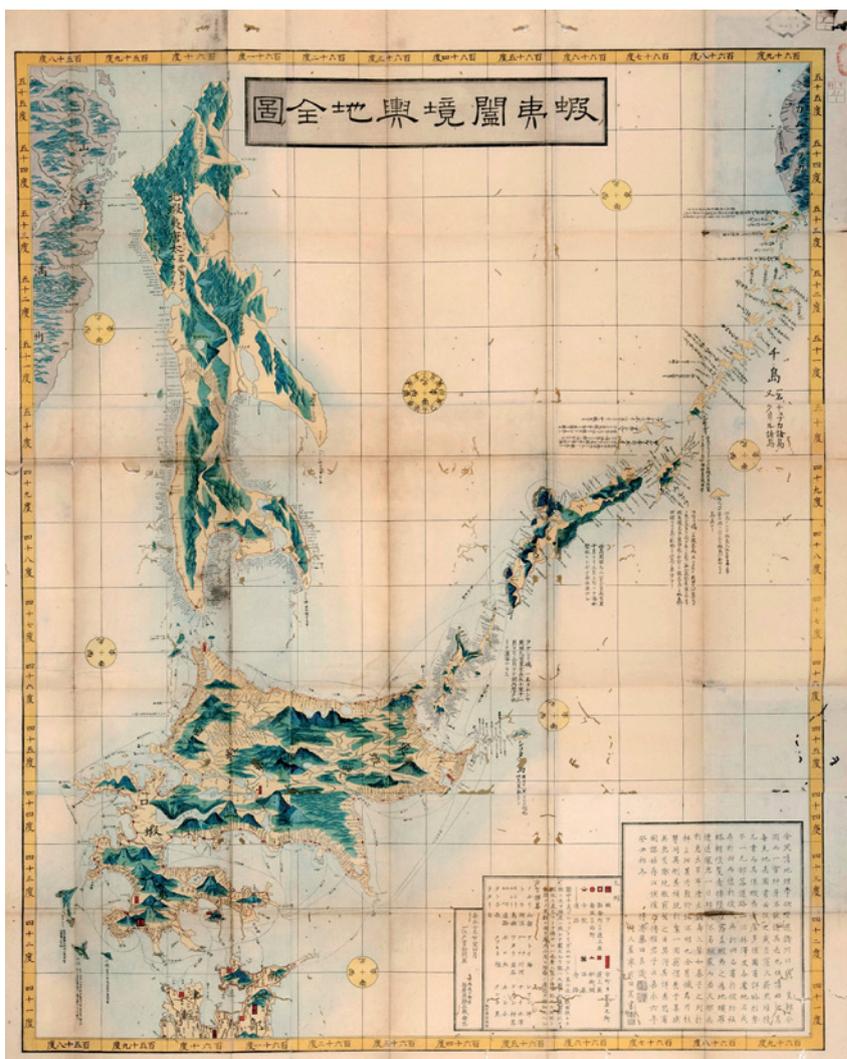
32

新訂万国全図

一 舗 高橋景保作 文化七年(一八一〇)刊 縦二二三・〇×横一九六・五cm

(請求記号〇三三二四八一)

江戸幕府の天文方であった高橋景保(一七八五〜一八二九)が間重富らの協力を得て、イギリスのアロー・スミスの世界図を原図として、新しい資料を取り入れながら作成したもので、江戸時代を代表する最新の世界図である。日本の北辺地域については間宮林蔵の探検結果を取り込み、世界にさきがけて樺太島、間宮海峡を正確に図示した点など、高く評価される。



33

蝦夷闔境輿地全圖

一編 藤田惇斎作 橋本蘭齋画 嘉永七年(一八五四)刊

縦二二三・四×横一〇一・一cm

(請求記号四九一七二二一 写字台文庫)

作者の藤田惇斎は事跡が不明の人物であるが、絵を手掛けた橋本蘭齋は浮世絵師で地図作家でもあった。蝦夷本島・千島列島・樺太を中心に、満州やカムチャッカ半島などユーラシア大陸の一部も描かれている。各地の詳細な地名が入り、蝦夷本島には陸路・海路が記されている。西洋から入ってきた地図の影響を受けていたようであり、経緯度を付すが、「凡例」で断るとおり正確なものではない。

VI

医学・本草学

古来、健康の維持は人々にとって大きな課題でした。病を克服して健康な状態を保つために有効な植物などについて研究する本草学が生まれました。また、病や人間の体の仕組みといった医学についても、研究が行われてきました。

この章では、今からおよそ九〇〇年前に作られた本草学の書物である『紹興校定経史証類 備急本草』や古代中国の医学書である『黄帝内经素問』、西洋の解剖書を訳して刊行したことで知られる『解体新书』、本草学者である松岡玄達が医学を学んでいた講義ノート『運氣論講義』などを紹介します。

石燭黃、雄黃、密、
 皂莢、朱砂、肉沙、青雫、雌黃、黃連、木通、
 皮、銅鈔、紫礦、砒、針、沙、筆、硯、麩、
 五穀部、葵、果、提、搗、粉、搗、
 糠、粃、蕎、麥、油、麻、
 江、豆、葛、豆、菓、豆、

34

おおたにもんじよ
大谷文書(八〇九七)

一紙 縦二七・六×横一五・八cm

二〇世紀初頭、西本願寺第二二代宗主大谷光瑞師(一八七六―一九四八)が中央アジアに派遣した大谷探検隊は、仏教に関する貴重な経典などを多数将来した。その中には、いくつかの本草学関係の文書断片も含まれていた。

この八〇九七番の大谷文書は、前半部分に抗炎症作用などがある黄連等が記されているが、どのように分類されているのか判然としない。また、後半部分は「五穀部」とあり、油麻や江豆などが記されているものの、後世の本草書に見られる分類などには合致していない。



35 紹興校定經史証類備急本草

二八卷 二四冊 (宋)王繼先等校 江戸後期写
 縦二六・五×横一八・八cm
 (請求記号〇二一五四三二一 写字台文庫)

本書は、宋代の王繼先(?〜一一八一)らによる薬物書であり、その成立・刊行・伝承には不詳な点が多々あるが、一般には次のように考えられている。宋代の紹興二十七年(一一五七)に王繼先が校上した『大観本草』が国子監から刊行され、ついで継先らは詔を奉じて同書を再校し、自注も加えて同二九年(一一五九)に『紹興校定經史証類備急本草』と名づけて進上した。

本書は龍谷大学図書館の写字台文庫本二点を含め、日本国内で計二十七点の所蔵が知られており、大英図書館・台北故宫博物院図書館・北京大學図書館も各一点を所蔵する。すべて日本国内の写本で、明治以降に国外へ渡った。龍谷大学図書館所蔵本には六一九葉が載り、うち五一〇葉について計七九二の図がある。後人の手がかかり加えられ、錯簡や誤脱もあるものの、絵はよく文も多く、内容が豊富な点では伝写本中の善本とされる。当本は医史学者岡西為人氏の解題を付し、昭和四六年(一九七二)に東京・春陽堂より原寸大で影印が出ている。

九種時珍續補三百七十四種雖曰醫家藥品其
 攷釋性理實吾儒格致之學可裨爾雅詩疏之缺
 一舊本序例重繁今止取神農為正而旁采別錄諸
 家附于下益以張李諸家用藥之例
 一古本百病主治藥略而不切王氏集要祝氏證治
 亦約而不純今分病原列之以便施用雖繁不紊
 也
 一神農舊目及宋本總目附于例後存古也

本草綱目附圖卷之首上

勅封文林郎四川蓬溪縣知縣蘄州李時珍編輯

金石部金類附圖

水	金	銀
		
金山	廣錫	廣銀
		

36 本草綱目

五二卷 卷首附圖二卷
 附瀕湖脈學一卷・奇經八脈考一卷・脈訣考證一卷 四〇冊
 (明)李時珍著 明萬曆三二年(一六〇三)刊
 (講求記号六九四二九一三五一四〇)

明代の医師で本草学者でもあった李時珍(一五一八〜一五九三)が著した薬学書である。歴代の著作に比べて、分量が最も多く、内容も充実している。因みに収録薬種は一八九二種、図版一一〇九枚、薬としての処方は一〇九六種に及んでいる。万曆三三年(一五九六)に南京で刊行され、いくつもの版を重ねた。

日本には、最初の刊行から数年後には輸入され、日本の本草学に大きな影響を与え、訓点を付した和刻本が長年にわたって刊行された。



藥性記

中焦穀府

中焦穀府ウ先ニカクイハ内經板府トシテ
下ニモ中焦穀府ウハシメニテテラシクシテ
健胃ノ有ラ本ニテウシハ下焦ノセテテ
七情ノ中ニテウシハ下焦ノセテテ
ヨリテテテテテテテテテテテテテテ
コリテテテテテテテテテテテテテテ
コリテテテテテテテテテテテテテテ
ホリテテテテテテテテテテテテテテ
コリテテテテテテテテテテテテテテ
味モヤリ性モ本ヤリニシテテテテテ
ミテテテテテテテテテテテテテテ
クニモシモヤリニシテテテテテ
味モヤリ性モ本ヤリニシテテテテテ

一名六十味

37 藥性記

一卷 一冊 松岡玄達(恕庵)著 貞享二年(一六八五)自筆
縦二四・三×横一七・五cm
(請求記号六九〇・九三三・九一 写字台文庫)

本書名は内題より採った。内題下に「一名六十味」とあり、扉書に「周
璞浅井先生講聞記／薬性記備忘記 六十味」、書末に「薬性記六十味抄
終／貞享二乙丑冬十有二月五日／松岡玄達尚白書」と記されるところか
ら、本書は医師浅井周伯(璞)(一六四三～一七〇五)の講義録で、松岡玄
達が貞享二年(一六八五)一二月五日に書き終えた自筆本と認められる。
全体の文字は若年時の玄達特有のものである。本書の伝写本を含め、他
に所蔵記録は見えない。
本書は中焦穀府の消化機能に効果がある薬味六〇種につき名称由来・
類品鑑別などの名物論、調製加工法、効能、使用法等が、ゾ体で記され
る。周伯の手許にノートのような原稿があり、それを読みあげる形で講
義していたらしい。



本草拔書上

散人元達記

草部第一 此本草拔書ハ草部先ニアテ
 テカイメソイテ時珍カ綱目ニハ金石ヲ先ニセ草ハ次ニ
 ノセタリ凡ハ草カワ子ニ用テ中ニツイテ別メシイワ金
 石ノクスリハセツテハツイトツイクスリニツイ用第一
 トニヤホツテ後者ニハアゲタリ 本ヤノ中ヲ拔書シテ
 ニ病証ヲ拔肩タルハ内経拔書ナリ 病症ノシラトウロ
 シ知ラセシタメナリ 病因ヲ知ラシメンタメニハ内経ノ要語
 シヌキイメメツ 藥性ヲシラセシタメニハコノ本ヤ申ノ
 要語ヲ拔肩スル 病因ヲ空クテ治法ヲホトコサンタメ
 ナリケラ本ヤ綱目ニハ一藥ニツイテモサシク主治カツ
 イソノニソノ干要カトウシヌクコノ拔肩ニハ中ノキヤ

38

本草摘要講義

二卷 一冊 松岡玄達(恕庵)著 貞享三年(一六八六)自筆
 縦三・八×横一七・三cm

(請求記号六九四二九六一一 写字台文庫)

本書名は外題より採った。内扉には「本草摘要抄」とあり、さらに次の頁の表題には「本草拔書私記全」とある。内題には「本草拔書」と記す。上巻の首行下方に「散人元達記」、下巻の奥書に「貞享三丙寅九月十九日／松岡氏玄園^因達記」、その裏面に「元禄元年温知斎／藏本」と記されるところから、玄達の自筆と認められる。本書を筆記したとき、玄達は一九歳だった。これを講義した人物は明記されていないものの、写字台文庫にある他の書物などから推察すると、おそらく浅井周伯の講義を筆録したと思われる。

周伯は明・李時珍の『本草綱目』から要点を抜き書きし、薬物の使用頻度に従い甘草・石膏の順に縮成し、『本草拔書』と名づけていた。その書は『本草摘要』とも呼ばれたので、その講義録を玄達が『本草摘要講義』としたのである。

黃帝内經素問卷之一



松達子直木

總論



黃帝ハ三皇ノ一人ナリ三皇ト伏羲神農黃帝ヲ云フ伏羲ハ
本徳ヲ以テ王ナリ神農ハ火徳ヲ以テ王ナリ黃帝ハ土徳ヲ以テ
王ナリ本生火生土三皇相生又天下ヲ保チタラフ黃ハ土ノ
色ナリ土徳ノ瑞アルシテノ故ニ黃帝ト稱ス帝生シタリニ時黃
竜視レテ土徳ノ瑞ヲ示シタリ黃帝ノ稱謚ニアラス又自ラナ
ツケテ玉フニモ非ス土徳允シテノ故ニ稱スルナリ史記五帝本紀
ニ詳ナリシカレバ黃帝内經ヲ著シ玉フハ史記ニ見ヘズソレヨ
ツテ後世コレヲ疑テ黃帝ノ書ニ非スト云フハ非也劉向等ガ
韓ノ諸公子ノ手ニ成ル書ナリト云程子ハ戰國ノ時ニ成ル
コレシカレバ本来廬ノナキコトニアラフレ黃帝ノ時ステニノ問答

40 内經素問講義

九卷 五冊 松岡玄達(恕庵)著 貞享年間(一六八四〜一六八七)自筆
縦二四・三×横一七・五cm
(請求記号六九〇・九一・二三十五 写字台文庫)

本書名は外題より採ったが、扉書には「素問抄」とも記す。卷一首行に「松達子直述」とあり、松岡玄達の筆録と分かる。各処にある「怡顔齋」の印記は玄達の号で、「松岡氏図書」の蔵印記も押される。本書は玄達の若年時に特徴的な文字で記されているところから、自筆本と認められる。しかし筆録した年代と講義者の記述はない。

本書は九卷五冊とボリュームがあり、入門者向けの講義と違い、『内經素問』という最も難解な古典の講義録である。『薬性記』をはじめとする玄達の自筆講義録の年代などから推すと、貞享三年(一六八六)の九月までに本書が筆録された可能性は低く、それ以降の貞享四年頃までに完成したと思われる。講義者は浅井家の家学を『内經』研究に決定つけた周伯にはば間違いないが、これを確証させる記録はまだ見当たらない。

黃帝史記五帝本紀曰黃帝者少典之子姓公孫名曰軒轅生而神靈降而能言幼而徇齊長而
 敦敏成而聰明聖智蓋天也
 黃帝居軒轅之丘黃帝居壽橫山丘義曰壽橫山也德配天地在正不在松曰帝
 內經 素問五內辰陽謂之海也宋法謂之經類經素問內者性命之道經者軌道之書
 黃帝內經 前漢書藝文志黃帝內經十八卷外經三十七卷 甲種自序曰按七卷藝文志黃帝內經
 十八卷今有鐵經九卷素問九卷二十九卷即得經也
 素問 傷寒論自序曰撰用素問九卷八十一種傷寒論大論拾遺錄錄并玉脈辨證為傷寒雜
 論集合十六卷新校正云按王氏不解所以名素問之義及素問之名起於何代按隋書經籍志
 始有素問之名甲種經序論皇華論之文云素問會病精解王叔和四晉人撰脈經云此素
 問鐵經漢張仲景撰傷寒卒病論集云撰用素問是則素問之名著於漢志上見於漢代也
 自仲景已前無文可見莫待而知據今世所存之書則素問之名著於漢志上見於漢代也
 全元起有說素問者本也問者有弟帝問岐伯也右陳性情之源五行之本故曰素問元起雖有此辭
 義未甚明按乾鑿度云天有形者生於無形故有太易有太極有太素太易者未見氣也
 太初者氣之始也太始者形之始也太素者質之始也氣形質具而病瘳由是相生故黃帝
 問此太素質之始也素問之名表或由此
 若真曰言人謂素問者以素問之問猶言素問也
 且古直人命 劉休云按全元起註本在第九卷王氏重次篇多後經篇首今註述篇必負元元紀本
 之卷第者欲存素問舊第自見爭之第次答云王氏之所移也下文上古有真人者必類註云真元直
 神靈大教禮曰傷七精氣神曰神靈之精氣曰靈類註云神靈聰明之至也以留言何須也骨中正也數
 厚本敏感速通
 不疾而速也

類一 養生
 上古天真論 黃帝內經素問卷之一
 黃帝曰聞吾師之問獨言去其書也
 岐伯曰上古有真人者
 其神氣天授自不可及也
 其志天授自不可及也
 其德天授自不可及也
 其能天授自不可及也
 其壽天授自不可及也
 其形天授自不可及也
 其氣天授自不可及也
 其精天授自不可及也
 其神天授自不可及也
 其魂天授自不可及也
 其魄天授自不可及也
 其心天授自不可及也
 其腎天授自不可及也
 其脾天授自不可及也
 其肺天授自不可及也
 其肝天授自不可及也
 其膽天授自不可及也
 其胃天授自不可及也
 其腸天授自不可及也
 其膀胱天授自不可及也
 其三焦天授自不可及也
 其六腑天授自不可及也
 其五臟天授自不可及也
 其百骸天授自不可及也
 其萬物天授自不可及也
 其天地天授自不可及也
 其日月天授自不可及也
 其星辰天授自不可及也
 其風雨天授自不可及也
 其雷霆天授自不可及也
 其鬼神天授自不可及也
 其禍福天授自不可及也
 其吉凶天授自不可及也
 其死生天授自不可及也
 其存亡天授自不可及也
 其消息天授自不可及也
 其盈虧天授自不可及也
 其消長天授自不可及也
 其盛衰天授自不可及也
 其興廢天授自不可及也
 其成敗天授自不可及也
 其存亡天授自不可及也
 其消息天授自不可及也
 其盈虧天授自不可及也
 其消長天授自不可及也
 其盛衰天授自不可及也
 其興廢天授自不可及也
 其成敗天授自不可及也

類二 飲食
 飲食有節起居有常不妄作勞故能形與神俱而
 盡終其天年度百歲乃去今時之人不然也以

41 黃帝內經素問

九卷 九冊 (唐)王冰註 寬文頃(一六六一~二六七)二刊
 縦二八・八×横二〇・〇cm
 (請求記号六九〇六一二六一二 写字台文庫)

本書は中国最古の医書として知られている。黄帝は伏羲、神農とともに三皇といわれる伝説上の人物であり、著者は黄帝に仮託したものであつて実際は不明である。また、秦代以前の著述と考えられる部分や、後漢時代や六朝時代の著述と推量される部分が混在しており、いつ頃成立したのかも不明である。

内容は、黄帝とその臣下の岐伯や雷公との問答形式で綴られている。現代医学の用語で言えば解剖・生理・病理など人体における内部環境的なことと、その外部環境である自然との関わりについて述べられている。治療法についての記載よりも、陰陽五行学説に基づく医学理論に関する記載が主となっている。

出痘發搐

益黃散治病

傷風流淨

驚搐等症候用藥餌

風癩及脚指常腫

小兒無補腎法

擬定諸方

序次丹溪小兒痘瘡治法

卷之六

附方 畢

明醫雜著卷之一

吳郡後學薛己註

醫論

或問仲景東垣河間丹溪諸書孰優學之宜何
主曰宜專主內經而博觀乎四子斯無弊矣蓋
醫之有內經猶儒道之六經無所不備四子之
說則猶學庸語孟為六經之階梯不可缺一者
也四子之書初無優劣但各發明一義耳仲景
見內經載傷寒而其變遷反覆之未備也故著
論立方以盡其變後人宗之傳用既久漸失其

42

明醫雜著

六卷 四冊 (明)王綸著 (明)薛己注 明嘉靖三〇年(一五五二)刊
縦二六四×横一六・五cm
(請求記号六九〇・九三二一四 写字台文庫)

医学理論書である『明医雑著』には、大別して明・王綸原本の一卷本系統と、これに明・薛己が注を加えた六卷本系統がある。当本は後者の系統で、嘉靖二八年(一五四九)の錢徽序しか年代を確認できる部分はないが、版式の特徴より六卷系初版の嘉靖三〇年宋陽山刊本と認められる。宋版を模した美しい嘉靖版の典型で、現存の同版は他に内閣文庫と北京図書館に各一点の所蔵が知られているのみである。

内容は方論・医論・医案よりなる。王綸はまだ不完全なので、公務を退いた後に続編も刊行するつもりだと自序に記しているが、果たせなかった。これゆえ薛己は嘉靖三〇年の自序に、本書を増補・加注し六卷本にまとめ刊行すると記す。これが当本である。なお一卷本系・六卷本系ともに江戸時代の和刻本がある。

釣藤散	醫金散	神号散
愈風餅子	川号散	又方川号散
菊花散	川号石膏湯	香橘飲
三五七散	消暑丸	芎朮散
茯神湯	玉液湯	潔白丸
沉香磁石丸	養正丹	芎窮湯
加味二陳湯	順元散	損益黑錫丹
易簡諸方 六道		

醫林類證集要卷之一目錄

醫林類證集要卷之一

中風門 孤竹 王璽 集

黄帝問曰風之傷人也或為寒熱或為熱中或為寒中或為瀉風或為偏枯或為風也其病各異其名不同或內至五臟六腑不知其解願聞其說岐伯對曰風氣藏於皮膚之間內不得通外不得泄風者善行而數變腠理開則洒然寒閉則熱而悶其寒也則衰食飲其熱也則消肌肉故使人快慄而不能食名曰寒熱風氣與陽明入胃循脉而上至目內皆其人肥則風氣不得外泄則為熱中而目黃人瘦則外泄而寒則為寒中而泣出風氣與太陽俱入行諸脉俞散於分肉之間與衛氣相干其道不利故使肌肉憤脹而有瘍衛氣有所凝而不行故其肉有不仁也厲者有榮衛熱則其氣不清故使鼻柱壞而色敗皮膚瘍

中風

43 医林類詳集要

一〇巻 二〇冊 (明)王璽著 明成化一八年(一四八二)刊
 縦二六〇×横一五・八cm
 (請求記号六九〇・九三九一・二〇 写字台文庫)

本書には成化一八年(一四八二)の王璽自序および同年の春徳堂の刊記があり、本書の初版本と分かる。黒口本で、字体も成化版の特徴を備えるが、印面からすると後印本である。当初版の完帙本は、他に北京大学図書館・上海第二医科大学図書館・南京図書館・台北国立中央図書館に各一点が所蔵されるが、日本ではおそらく当本が唯一であろう。

内容は病門別に分類され、中風門より始まる典型的な方論書で、巻九が婦人門、巻一〇が老人門・小兒門となっている。

中国では他に正徳版・嘉靖版、また朝鮮にも銅活字版がある。それらが室町時代より伝来し、日本医学中興の祖・曲直瀬道三(一五〇七-一五九四)の『啓迪集』(天正二年(一五七四)に二七一回もの引用が見える。また寛文元年(一六六一)の和刻本もある。

堂 珍

袖珍方卷之一

風為有病之長故諸方者論之岐伯所謂大法有四一曰偏枯半身不遂二曰風痲於身無痛四肢不收三曰風癱者奄忽不知人也四曰風痺者筋脈類風狀此特言其大証而又言卒然而中者皆因氣本虛弱陰失調或喜怒憂思驚恐勞役以致真氣耗散廢理不寔邪氣乘虛而入及其中也重則半身不遂口眼喎斜肌肉疼痛痿痺痲痺或癱瘓不仁舌強不語精神恍惚驚悸恐怖痞滿痰涎其脈其脈之原若中於肝者人迎與左關上脈皆青惡風自汗左脇痛中於心者人迎與左寸口脈皆赤翁翁發熱者不能言中於脾者人迎與右關上脈皆赤痛皮肉間動身體通黃中於肺者人迎與右寸口脈皆色白口鼻多喘中於腎者人迎與左尺脈皆滑而滑而滑則小腹脹滿不利中於胃者兩關脈皆浮而大類上

頭痛	心痛	眩暈
腰脇痛	脚氣	五痺
五疔	蠱毒	諸淋
消渴	赤白濁	水腫
脹滿	積聚	宿食
自汗	虛煩	健忘
癲癩	陰癩	癩冷
積熱	諸血	痔漏
脫肛	遺尿失禁	雜方 <small>附諸香</small>

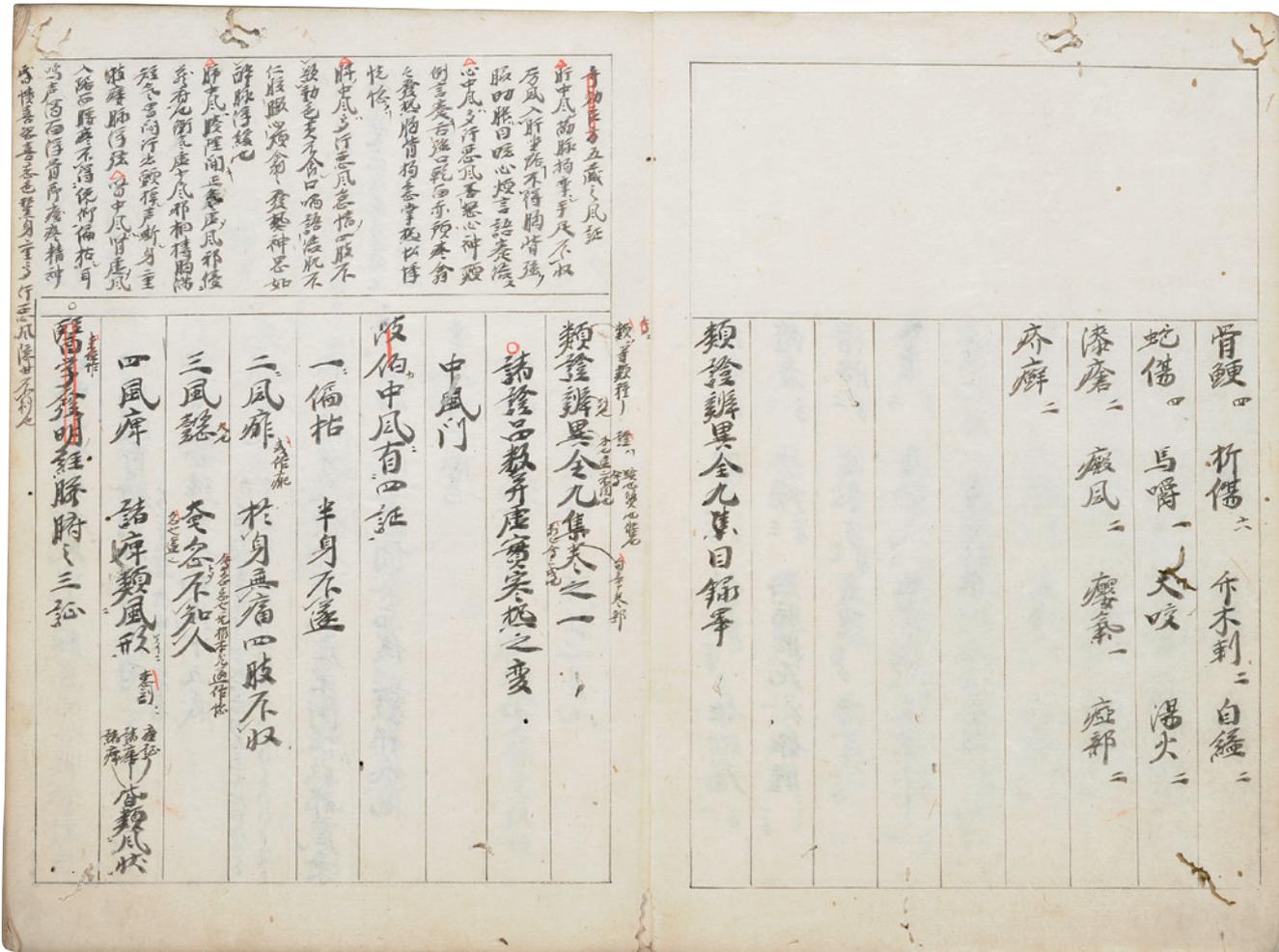
44 袖珍方

四卷 四冊 (明)李恆等編 明弘治五年(一四九二)刊
 縦三三×横一三六cm
 (請求記号六九〇・九一四四一四 写字台文庫)

当本は編者名を記した序文が欠落するが、卷末に「皇明弘治壬子仲春揚氏清江書堂重刊」の刊記があり、同版本より明李恆等の編と比定する。北京大學圖書館に永樂一三年(一四一五)刊本、武田・杏雨書屋に成化九年(一四七三)熊氏中和堂重刊本が各一点、当本と同版が内閣文庫に二点所蔵されている。それらの序文より明洪武二三年(一三九〇)の初版があったと分かるが、伝本はない。

編者の李恆は医術に精通し、洪武年間初めに太医院の医官となり、さらに明太祖帝の第五子、朱橚(定王)の周府で良医の官を任じた。その命で本書を編纂した。ちなみに、「袖珍」とは当時のポケットサイズをいい、当本もやや小型でびっしりと文字が刻されている。

本書は病門分類別の典型的な方論書で、卷一の風門から始まり、卷四の小兒門で終わる。日本には室町時代から渡来していたが、江戸期にも和刻はされなかった。

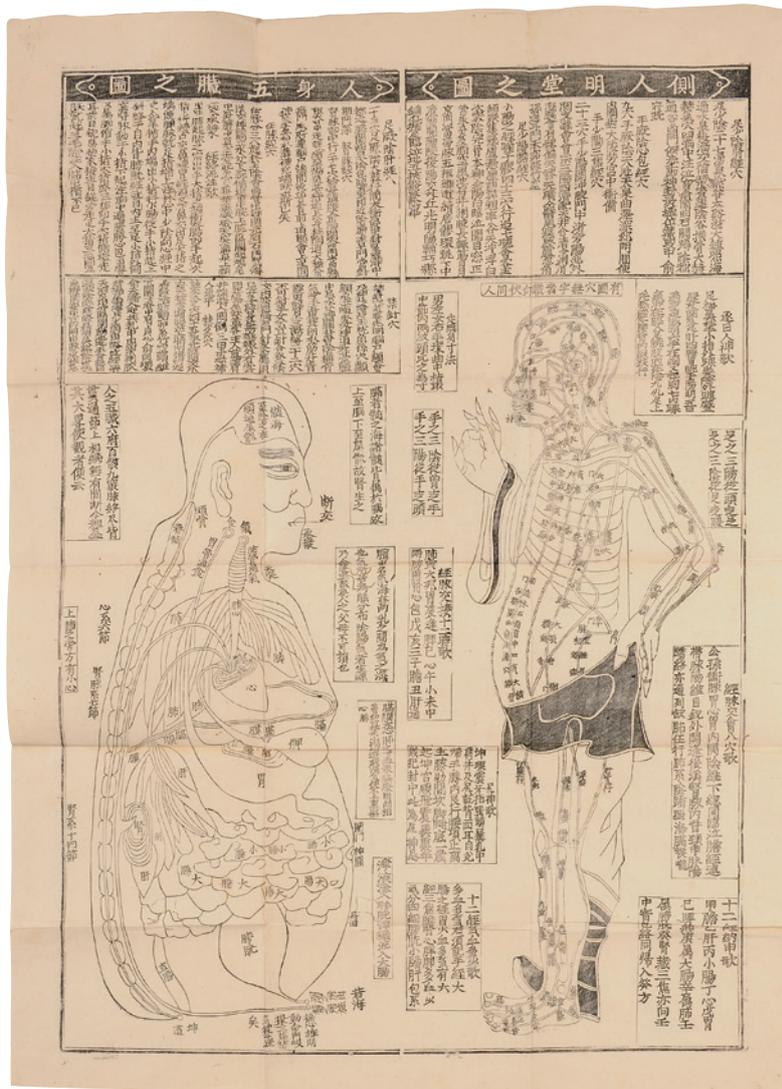


45 全九集

四卷 三冊 月湖編 曲直瀬道三頭注
 天正一七年(一五八九)写 縦二七・四×横二〇・九cm
 (請求記号〇三二五二六三 写字台文庫)

『全九集』は、室町時代の僧医月湖(生没年不明)が法を求めて渡明し、明の景泰三年(一四五二)に著述したものである。月湖の著した原撰本、医師曲直瀬道三が注を加えるなどして再編した道三増訂本、また和読した仮名混じり本などがある。こうしたものと比較すると、当本の頭注は道三のもので、このように明別された伝本は他に見当たらず、道三研究の上でも貴重なものである。

当本の末冊には「天正己丑仲秋吉辰 快」の奥書と「快」にかぶせた印記があり、書式・装釘等からも同年(天正一七年(一五八九))の写本と認められる。道三が本書を増訂したのは永禄一〇年(一五六七)で、当本は増訂本の旧姿を残す唯一の伝本であろう。内容は中風門に始まり、各門に医論と医方を記す方論書である。



46

側人明堂之図・人身五臟之図

一舖 江戸中期頃刊 縦八二〇×横五九五cm

〔請求記号〕〇三二一五五―一／二

中国では気が流れるルートを経脈といい、各経脈上に針や灸の治療を行う経穴(ツボ)がある。後漢の末頃には経脈ごとに各経穴への針灸方法や効果をまとめた『明堂経』があり、のちに経脈や経穴を描いた人体図を「明堂図」と呼ぶようになった。当然それには正面・背面・側面の図が必要であり、本資料名に見える「側人」は側面を意味する。

また、伝統中国医学では、人間の内臓を五臓(肝・心・脾・肺・腎)と六腑(胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦)から成ると考え、それぞれの働きが単なる内臓としてだけでなく、生理的機能や精神活動にまで及ぶと考えられていた。この五臓六腑を視覚的に理解するために、「人身五臓之図」が作成された。

本資料は、「側人明堂之図」と「人身五臓之図」を一紙にして刊行したものである。本来は明の嘉靖二九年(一五五〇)に一括刊行された仰人(正面)・伏人(背面)・側人の明堂各図と人身五臓の図を、江戸時代の中期頃に一括覆刻したものの一つではないかと考えられる。

47 解体新書

四巻序図一巻 五冊 杉田玄白・前野良沢・中川淳庵 小田野直武
 安永三年（一七七四）刊 縦二六・八×横一八・〇cm
 （請求記号六九〇・九三五六一六 写字台文庫）

也。又或震然揭旗鼓。亦皆不知解體之法。徒屬孟浪。豈不閔乎。惜哉。世雖有豪傑。士汚習惑乎耳目。未能披雲霧而見青天也。故苟非改面目者。則不能入其室也。嗚呼。人有能有不能。余之不才。斷斷無它技。唯獨於斯業。專精得以明之。誠無慙乎古之人。而其所權輿。要在改面目也。如與余同志。從事于斯。則庶乎得而至也。雖然。余不爛乎文辭。故於斯書。姑達其意而已。讀者如有不解者。追余之生質。訪之可也。



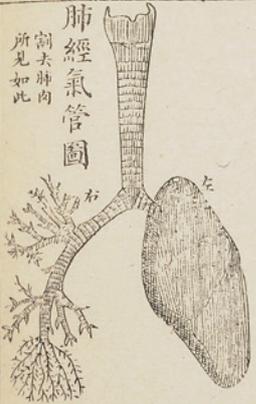
わが国最初の西洋解剖書の訳本である。原典は、ドイツ人ヨハン・アダム・クルムスの『解剖図譜』の独蘭訳『ターヘル・アナトミア』である。前野良沢（一七二三～一八〇三）を主に、杉田玄白（一七三三～一八一七）・中川淳庵（一七三九～一七八六）らが桂川甫周（一七五一～一八〇九）らの協力を得て翻訳にあたり、安永三年（一七七四）に刊行した。本文四冊、附図一冊から成る。初版本である。

明和八年（一七七二）三月四日、江戸小塚原における女体の腑分けの見学により、『ターヘル・アナトミア』の図の正確さに感銘を受け、その翌日から三年の歳月をかけて翻訳し、非常な努力をして完成した。内容は、原典の本文だけを訳し、本文の数倍に及ぶ脚註には触れず、二八編に細分されている。

図は、小田野直武（一七四九～一七八〇）が模写したものであるが、裸体の男女が左右に立ち、上方に王冠と紋章を付した盾がある扉絵は、原書である『ターヘル・アナトミア』のものとは異なっている。現在では、スペインの解剖学者ワルエルダが著した解剖書の扉絵と構図がほぼ一致していることが指摘されている。また、直武が挿絵を担ったことは、杉田玄白と交流があった平賀源内（一七二八～一七八〇）との関係が大きいとされている。

本書の翻訳・刊行は、一時代を劃する偉業として医学史上高く評価され、以後日本医学の夜明けを築き上げた名医家たちが次々と本書に学んだ。まさに医学の発達に偉大なる貢献をした、貴重な資料である。

肺中二管圖 剖肺一葉所見如此



肺經

肺為呼吸之經，位居諸臟之上，體窩向內，中央有心管，血脈總管，隔之質輕而鬆，週圍有夾膜裹之，狀若懸磬，系以氣喉，色如縞，映紅，錯雜相間，黃右三左二，披離下垂，後面豐圓，粘附背骨，前邊利薄，逼近胸腔，并左右兩脇，頂尖而圓，略出首肋之上，底窩而瀾，貼乘膈膜之皮，右肺大於左，因心尖向左微占其位，左肺長於右，緣肝經處右稍高於脾故也，大概胸膈潤者，其肺必大，凡呼吸之時，胸肋舒張，膈膜鼓動，諸臟相隨以應之，膜沫濡潤以助之，故剖割肺體，見有痰沫在內，拭去痰沫，便見管竅，俗曰甚多，即難經所謂二十四空也，但難經以為分布諸臟之氣而不

全體新論

經

脈管由心上行圖



48 全体新論

一卷一冊 ホブソン(合信)著 咸豐元年(一八五二)刊
 縦三五×横一六・二cm
 (請求記号六九〇・九一五〇一 写字台文庫)

『全体新論』は、ロンドン伝道医療宣教師として中国に派遣されたホブソン(一八一六〜一八七三)によって咸豐元年(一八五二)に広州で著され、同年上海で刊行されたものである。本書は、主に人体の構造を解剖学的に記述しており、人や一部の動物も含んだ骨格や人の神経・血管・臓器等のしくみから妊娠中の胎児の様子などを詳細な絵とともに説明している。

この『全体新論』は、『西医略論』・『内科新説』・『婦嬰新説』とともに中国医学の発展に大きく貢献した。また、『博物新論』を加えた五種の著書は、既に『解体新書』やその改訂書である『改訂解体新書』が刊行されていた幕末明治初期の日本にも輸入され、広く読まれるとともに、翻刻や註解を付けた版が多く刊行された。

戸田旭山先生撰

中條流産科全書

攝陽書舗 定榮堂梓

序
 夫婦人有經産也。舉世是為難危。其故自古醫有十三科。而大科為其最。亦別設婦人科。以列于其數。雖均之。可任大科哉。其所以別之者。以有夫經産故也。竊以雖常産

49

中條流産科全書

一卷附夢生之説 一冊 村山林益著 戸田旭山刪補
 安永七年(一七七八)刊 縦二六・五×横一〇・三cm
 (請求記号六九〇九一四七四一 写字台文庫)

豊臣秀吉の家臣で医師であつた中条帯刀(生没年未詳)を始祖とする産婦人科の一派である中条流は、産婦人科に関係する様々な症状を投薬により治療することを主としていた。しかしながら、江戸時代には、墮胎を専門とする者が現れ、中条流は墮胎医師としてのイメージが強くなり、今日の物語や劇中にも描かれることがある。

本書は、婦人科の書物として、特に産前・産後に見られるあらゆる症状について、投薬の処方を書いたものである。また、婦人の症状に限らず、生まれた小児についても、夜泣きなどの諸症状に関する投薬の処方が記されている。世の中に流布しているイメージと異なり、実際の婦人科としての「中条流」を知ることができる資料である。

舉手過頭產出圖



手與頭齊出非橫生也

兒面先出圖



此兒腹向母腹

兒脚臍帶先出圖



尾骶骨

兒臀先出圖



尾骶骨

50 婦嬰新説

一卷一冊 ホブソン(合信)著 清咸豊八年(一八五八)刊

縦三五・六×横一六cm

(請求記号六九〇九一五六二一 写字台文庫)

『婦嬰新説』は、咸豊八年(一八五八)に『全体新論』の著者ホブソンによって著され、同年上海で刊行されたものである。本書は『全体新論』を補うものであり、その内容は、主に妊婦の過程(月経・出産・産後等)に関する病気の症状や、それらに対する薬の作り方・使用方法について、乳児・幼児の成長に関する記述が詳細に説明されている。また若干ではあるが、胎児等の絵が掲載されている。

前出の『中条流産科全書』と同じ産婦人科に関する書物であり、ともに西本願寺歴代宗主の旧蔵書である写字台文庫の蔵書である。お産が生命に関わることの多かった時代にあつて、子孫を残していくために、東洋・西洋の医学を問わず、収集されたのかもしれない。

